

福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

波寄三宅田遺跡

—一般国道416号道路改良工事に伴う調査—

第1分冊 遺構編

2 0 2 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

な み よ せ み や け だ い せ き
波寄三宅田遺跡

—一般国道416号道路改良工事に伴う調査—

第1分冊 遺構編

2 0 2 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、一般国道416号道路改良工事に伴い、平成22・23年度に実施した波寄三宅田遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。

波寄三宅田遺跡は、福井市の中心部から北西に位置する波寄町に所在します。波寄町の北側一帯は九頭竜川左岸の豊かな穀倉地帯となっており、かつて潟湖が広がっていた面影を今日にとどめています。

調査の結果、奈良・平安時代の掘立柱建物群や、井桁を備えた大型の井戸が見つかりました。当地はまさに「ミヤケ」の地名にふさわしい、公的施設が置かれていた可能性が示唆されます。

また、調査区の東側で検出された川跡からは、上層で弥生時代後期から古墳時代前期の土器・木製品、下層で大量の縄文時代早期から後期の土器・石器など、多種多様な遺物が出土し、発掘調査例が少なかった福井市北西部の原始・古代の姿を復元する上で、重要な資料を得ることができました。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくことになれば、幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの地元の皆様からご支援を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

令和3年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 赤 澤 徳 明

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般国道416号道路改良工事に伴い、平成22年度から平成23年度にかけて発掘調査を実施した波寄三宅田遺跡（福井市波寄町所在）の発掘調査報告書である。報告書は、第1分冊遺構編、第2分冊遺物編Ⅰ、第3分冊遺物編Ⅱで構成され、本書は第1分冊遺構編にあたる。
- 2 波寄三宅田遺跡の発掘調査は、福井県土木部福井土木事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、平成22年度は清水孝之、御嶽貞義、土谷崇夫、池原悠貴が、平成23年度は鈴木篤英（現一乗谷朝倉氏遺跡資料館）、中森敏晴、木村茉莉、土谷崇夫、中村嘉之、北川 遼が担当した。
- 3 波寄三宅田遺跡の調査は、平成22年度は平成22年（2010）7月1日から12月28日まで、平成23年度は平成23年（2011）4月1日から8月31日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成23年（2011）4月1日から令和3年（2021）3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は清水があたり、鈴木、清水が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。
鈴木 第1章・第2章 清水 第3章・第4章
- 5 波寄三宅田遺跡に係るこれまでの成果の発表のうち、本書との間に齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構の主要な挿図の作成は、株式会社日本海航測に委託し、これを編集した。
- 7 本書に掲載した遺構配置図および遺構実測図は、中央測量設計株式会社・有限会社森建に委託して作成したものを一部改変して使用した。また、上空からの写真は航空測量時に中央測量設計株式会社が撮影したものである。
- 8 本書で使用した遺構の略称は、次の通りである。
SB：掘立柱建物 SD：川・溝 SE：井戸 SK：土坑・土坑墓 SX：廃棄土坑・方形周溝墓 P：ピット（掘立柱建物の柱穴等を含む） S：川・溝の土層断面 X：一定量のまとまりを持つ遺物の出土地点
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高（m）を示す。また、挿図の方位については、遺構配置図・遺構実測図は国土平面直角座標第VI系の座標北を、地形図等は真北を用いた。X・Y座標値は同第VI系に基づいている。
- 10 土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づいている。
- 11 調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査ならびに本書の作成に当たり、次の方々および機関からご助言・ご協力・ご指導を頂いた（敬称略）。
月輪 泰 波寄区 鶴公民館 福井市教育委員会
- 13 発掘調査には、地元の方々のご参加・ご協力を頂いた。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および整理作業員があたった。

目 次

	頁
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の概要	3
第2章 地理的・歴史的環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 遺 構	13
第1節 第I区域の遺構	13
第2節 第II区域の遺構	21
第3節 第III区域の遺構	36
第4節 第IV区域の遺構	54
第4章 まとめ	64
第1節 遺跡について	64
第2節 掘立柱建物について	64

写真図版目次

図版第1 遺構 第I区域7区

- (1) 第I区域7区(南から)
- (2) 第I区域7区(西から)

図版第2 遺構 第I区域7区

- (1) 7区SK1(南東から)
- (2) 7区SK2(東から)
- (3) 7区SK3(南から)
- (4) 7区SK4(南から)
- (5) 7区SE1(南から)
- (6) 7区SE2(南から)
- (7) 7区SE3(南から)

図版第3 遺構 第I区域7区

- (1) 7区川, SD15・16(南東から)
- (2) 7区川X003出土土器(南から)
- (3) 7区川X004出土土器(東から)
- (4) 7区川X001出土土器(南から)
- (5) 7区川X002出土土器(南から)
- (6) 7区川X005出土土器(南から)
- (7) 7区川X006出土土器(南から)
- (8) 7区川X007出土土器(北から)

図版第4 遺構 第II区域6区

- (1) 第II区域6区(北西から)
- (2) 第II区域6区(南西から)

図版第5 遺構 第Ⅱ区域5区

- (1) 第Ⅱ区域5区(南西から)
- (2) 第Ⅱ区域5区(北西から)

図版第6 遺構 第Ⅱ区域5区

- (1) 第Ⅱ区域5区(北西から)
- (2) 5区SB1(北西から)
- (3) 5区SB1柱穴5(北から)
- (4) 5区SB2(北西から)
- (5) 5区SB3(北西から)

図版第7 遺構 第Ⅱ区域5区

- (1) 5区SB4(北西から)
- (2) 5区SB5(北西から)
- (3) 5区SB6(北西から)
- (4) 5区SB6柱穴9(南東から)
- (5) 5区SB6柱穴7(北東から)
- (6) 5区SB7(北西から)
- (7) 5区SE1(南から)

図版第8 遺構 第Ⅱ区域5区

第Ⅲ区域2・3区

- (1) 5区SE2(北西から)
- (2) 第Ⅲ区域2・3区(北西から)

図版第9 遺構 第Ⅲ区域2・3区

- (1) 第Ⅲ区域2・3区(南西から)
- (2) 第Ⅲ区域2・3区(北西から)

図版第10 遺構 第Ⅲ区域3区

- (1) 3区SB1(東から)
- (2) 3区SB6(北西から)
- (3) 3区SB4(北西から)
- (4) 3区SB3(南東から)

図版第11 遺構 第Ⅲ区域2・3区

- (1) 3区SB7(東から)
- (2) 3区SB8(北から)
- (3) 2区SB1(北から)
- (4) 3区SK9(南から)
- (5) 3区SE1井戸枠上面(北から)
- (6) 3区SE1(北から)
- (7) 3区SE2(南西から)

図版第12 遺構 第Ⅲ区域3区

- (1) 3区SE3(北から)
- (2) 3区SE5(西から)
- (3) 3区SE5井戸枠(南東から)
- (4) 3区SE5井戸枠(西から)
- (5) 3区SE6(北東から)
- (6) 3区SE6井戸枠上面(北西から)
- (7) 3区SE6(北西から)
- (8) 3区SE6井戸枠(北東から)

図版第13 遺構 第Ⅳ区域1区

- (1) 第Ⅳ区域1区(南から)
- (2) 第Ⅳ区域1区(西から)

図版第14 遺構 第Ⅳ区域1区

- (1) 第Ⅳ区域1区(南東から)
- (2) 第Ⅳ区域1区(南から)

図版第15 遺構 第Ⅳ区域1区

- (1) 1区SK1(北西から)
- (2) 1区SK2(北から)
- (3) 1区SE1(北から)
- (4) 1区SE1底部(東から)
- (5) 1区SE1井戸枠(東から)
- (6) 1区SE1井戸枠底部(北東から)
- (7) 1区SE1井戸枠北西隅(北西から)

図版第16 遺構 第Ⅳ区域1区

- (1) 1区SK1(南西から)
- (2) 1区SD1(北から)
- (3) 1区SD1(南から)
- (4) 1区SD3(南西から)

図版第17 遺構 第Ⅳ区域8区

- (1) 第Ⅳ区域8区(北西から)
- (2) 8区川床木道(南西から)

図版第18 遺構 第Ⅳ区域8区

- (1) 8区川VI層除去後(北西から)
- (2) 8区川断面S1(北東から)

挿 図 目 次

	頁
第1図 平成20～22年度波寄三宅田遺跡試掘・立会範囲・調査区位置図	1
第2図 調査区域図	2
第3図 発掘調査風景	5
第4図 発掘調査風景	6
第5図 嶺北地方の地形図	7
第6図 波寄三宅田遺跡周辺の地形図	8
第7図 周辺の主要遺跡	10
第8図 第Ⅰ～Ⅳ区域遺構全体図	15・16
第9図 第Ⅰ区域 7区遺構全体図	17・18
第10図 第Ⅰ区域 7区SK 1～4、SE 1～3	19
第11図 第Ⅰ区域 7区P82～84、川a～c・SD15・16、X001・002・007	20
第12図 第Ⅱ区域 5・6区遺構全体図	23・24
第13図 第Ⅱ区域 5区SB 1・2	25
第14図 第Ⅱ区域 5区SB 3・4	26
第15図 第Ⅱ区域 5区SB 6・7	28
第16図 第Ⅱ区域 5区SB 5・8・9	29
第17図 第Ⅱ区域 5区SB10、6区SB 1	30
第18図 第Ⅱ区域 5区SK 1・2・7・8、SE 1	31
第19図 第Ⅱ区域 5区SE 2・3、SD 1	33
第20図 第Ⅲ区域 2～4区遺構全体図	37・38
第21図 第Ⅲ区域 3区SB 1・2・5～7	39
第22図 第Ⅲ区域 3区SB 3・4	40
第23図 第Ⅲ区域 3区SB 8～10、2区SB 1・2	42
第24図 第Ⅲ区域 3区SK 2～5・7・9・17、2区SK 8・9	44
第25図 第Ⅲ区域 3区SE 1～4	46
第26図 第Ⅲ区域 3区SE 5～7	47
第27図 第Ⅲ区域 2区SE 1～8	48
第28図 第Ⅲ区域 3区SX 2・3、2区SX 1	49
第29図 第Ⅳ区域 1・8区遺構全体図	55・56
第30図 第Ⅳ区域 1区SK 1～3、SE 1	57
第31図 第Ⅳ区域 1区SD 1・4・5、8区川S 1・S 2	59
第32図 第Ⅳ区域 8区川内検出木道	60

表 目 次

	頁
第 1 表 第 I 区域遺構觀察表	20
第 2 表 第 II 区域遺構觀察表	34
第 3 表 第 III 区域遺構觀察表	50
第 4 表 第 IV 区域遺構觀察表	61
第 5 表 掘立柱建物一覽表	63
第 6 表 掘立柱建物面積別分類表	63

第1章 調査の経緯

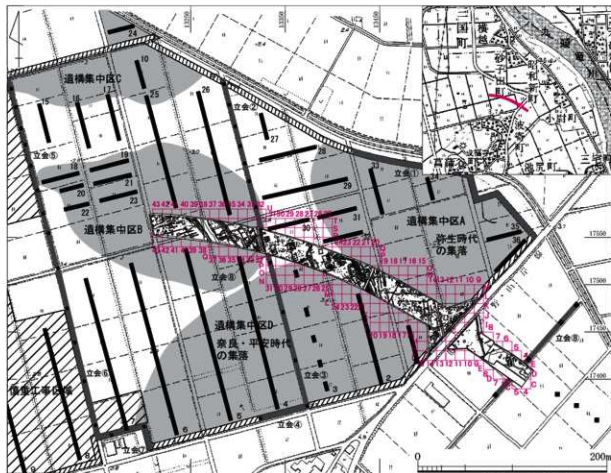
第1節 調査の経緯

1 調査の経緯

波寄三宅田遺跡は、福井市街の北西、九頭竜川左岸に位置し、福井市波寄集落の北東側に広がる水田に立地する（第1図）。遺跡は古墳、奈良・平安時代、近世の遺物散布地として周知の遺跡となっている。周辺を見渡すと、西側は水切・波寄遺跡、北側は菖蒲谷頭岡遺跡、南東側は小尉遺跡に囲まれ、それらの中心に位置する波寄町の小丘陵は波寄古墳群で占められ、遺跡の密集地帯を形成している。

平成20年(2007)度より福井農林総合事務所(以下、福井農林と略す)により、波寄三宅田遺跡を含む波寄集落北側の水田について圃場整備事業が実施されることになった。しかし、関係機関との埋蔵文化財の取り扱いに関する事前の協議を行わないままに、工事が着手される事態が生じた。

そのため、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文と略す)が同年11月27・28日に現地確認を行い、集落から北東側へ200m隔てた耕作土を除いた水田にて弥生時代の遺構が露出している状況が判明した。この結果を受けて、福井県教育庁文化課(現生涯学習・文化財課、以下、文化課と略す)と県埋文が福井農林と協議を行い、以後の事業実施に際しては、これ以上の採掘を行わないことや、遺構面の保護を行うことで合意した。



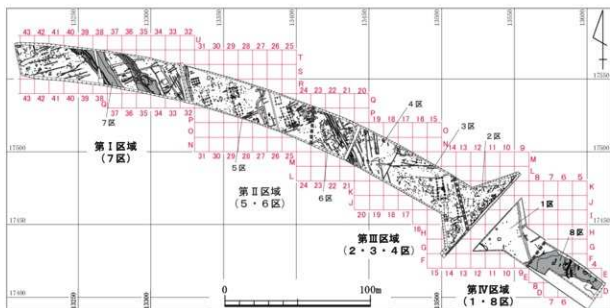
第1図 平成20～22年度波寄三宅田遺跡試掘・立会範囲・調査区位置図(縮尺1/4,000)

事業は、排水フリームの埋設工事から始めることとなり、県埋文では平成21年(2008)1月19日から2月13日にかけて、事業地を1～8区に区分して工事立会を実施した。その後、工事の進捗に従い、以降平成22年(2010)度にまでに追加の工事立会①～⑧を実施した。その結果、波寄三宅田遺跡には遺構集中区A～Dが存在することが確認され、遺構集中区Aは弥生時代後期の集落、遺構集中区B・C・Dは奈良・平安時代を主体とする集落であることが推測された。また、立会④では奈良・平安時代の遺構が確認され、立会⑧では弥生時代後期の土器が出土した(第1図)。

圃場整備事業が終了した後、つづけて一般国道416号道路改良工事が具体化した。このため、事前に文化課および県埋文と福井土木事務所との間で協議が行われた。その結果、事業予定地内に改めて試掘調査を実施することとなった。試掘調査は県埋文が平成21年(2009)6月1・2日、同年10月23日に実施し、事業予定地西側では弥生時代から平安時代の遺構・遺物を検出し、南東側では多くの遺物を含む川の存在を確認した。しかしながら、路線変更は困難であり、本調査を実施し、記録保存を行うことになった。調査期間は平成22年(2010)7月1日から平成22年12月28日および平成23年(2011)4月1日～同年8月31日にわたり、調査面積は総計約10,670㎡(平成22年度約5,870㎡、平成23年度約4,800㎡)を対象とした(第1図)。

2 調査の方法

調査区は幅約23～80m、全長約430mと長大であり、西から南東かけて弓状に曲がる形状を呈す。調査にあたっては国家座標上に一辺10mの方形グリッドを設定し、東から西方向にかけて0～44、南から北方向にかけてA～Uまでの番号を付した(第2図)。調査と工事を併行して行うため、調査区を1～8区に細分し、平成22年度は1～5区、平成23年度は6～8区を調査したが、煩雑さを避けるため、本報告では改めて西側から第1区域(7区)、第2区域(5・6区)、第3区域(2～4区)、第4区域(1・8区)と区分した。遺構の識別については、掘立柱建物にはSBを付し、柱列を構成する柱穴には遺物の含有は問わず柱穴番号を付した。土坑・土坑墓、井戸、溝、ピットについては、規模や深度に関わらず、遺物を含んでいるものを対象にSK、SE、SD、Pを付した。記録方法については、1/50縮尺の全体図および1/10～1/20縮尺の個別の遺構実測図を作成し、航空写真測量図と合成した。



第2図 調査区域図(縮尺1/2,600)

第2節 調査の概要

1 調査の概要

波寄三宅田遺跡は、福井市中心街から北西へ約12km離れた波寄集落の北側に広がる。現状は水田であり、九頭竜川左岸の氾濫原に立地する。本調査は、「一般国道416号道路改良工事」に伴うものであり、平成22・23年度において発掘調査を実施した。調査総面積は約10,670㎡をはかる。

調査時は、事業地を1～8区に区分し、着手可能となった地区から順に番号を付した。平成22年度は、1～5区を調査し、弥生時代後期の墓、溝、奈良・平安時代（以下、古代と略す）の総柱建物や掘立柱建物、鎌倉時代（以下、中世と略す）の井戸を検出した。平成23年度は、6～8区を調査し、縄文時代早期～晩期、弥生時代後期の遺物を大量に含む川、古代の掘立柱建物、井戸を検出した。前章で述べたように、本報告では、西から東南にかけて、改めて第Ⅰ～Ⅳ区域に区分して報告する。

第Ⅰ区域 7区に相当し、Q32～U44の範囲が該当する。面積は約2,500㎡をはかる。調査区内の西側を中心に土坑、井戸等を検出した。土坑の中には、弥生時代の土坑墓と推定されるものもある。井戸7区SE2の底面で須恵器の壺と、長さ1.0mの棒状木製品を検出した。井戸7区SE3では、須恵器の盤、杯、蓋が出土し、盤の外周底部には「五月女」の墨書が記されていた。調査区中央付近では、北から南へ流れる川a～cが並行して検出され、西側の川aからはTK47期の須恵器蓋、中央の川bと東側の川cからは弥生時代後期から古墳時代前期の土器を散発的に検出した。

第Ⅱ区域 5・6区に相当し、O20～R32の範囲が該当する。5区は面積約2,060㎡、6区は面積約700㎡を測り、調査面積は約2,760㎡となる。5区では掘立柱建物、井戸、溝を検出し、掘立柱建物の多くは主軸（桁行）を南北方向にとり、ほぼ同一方向に向けて構築されていた。6区は古代の遺物を含む小穴を若干検出したが、調査区の大半は後世の削平を受けていた。

第Ⅲ区域 2～4区に相当し、L9～M21の範囲が該当する。2区は面積約580㎡、3区は面積約1,530㎡、4区は面積約700㎡を調査し、合計の調査面積は約2,810㎡となる。

2・3区では主に掘立柱建物、井戸、溝等を検出し、掘立柱建物の多くは主軸（桁行）を南北方向にとり、ほぼ同一方向に向けて構築されていた。井戸3区SE6は弥生時代の井戸と推定され、底部に列り貫き桶を据えていた。その他の井戸は中世のものと考えられ、井戸3区SE1・3では底部に曲物棒を据えていた。井戸3区SE5では方形の縦板組横棧留めの井戸棒を検出した。4区は古代の遺物を含む小穴を若干検出したが、6区と同様に調査区の大半は後世の削平を受けていた。

第Ⅳ区域 1・8区に相当し、D3～G12の範囲が該当する。1区は面積約1,000㎡、8区は面積約1,600㎡を調査し、合計の調査面積は約2,600㎡となる。

1区では方形周溝墓、井戸、溝等を検出し、溝1区SD1内からは大量の弥生時代後期の土器が出土した。8区では、古代の土器を含むⅠ・Ⅱ層の黄灰色土と、Ⅲ層の黒褐色土を除去すると、西から東へ流れる大きな川を検出した。8区川は推定で幅約18m、最大深度は約1.8mをはかり、両岸はⅣ層の緑灰色土を地山としていた。堆積土層の中心には植物や木の腐食物でなるV1層が厚さ10～30cmで堆積し、下位にはV2層が厚さ30～40cmで堆積していた。V層には、弥生時代中期～後期末の土器、古墳時代前期の土器と木製品が多く含まれ、さらに巨木を「木道」として据えていた。Ⅵ層は、川の両岸をなすⅣ層が堆積する以前の古い層であり、大量の縄文土器を含んでおり、早期～後・晩期の土器や石器を検出した。8区の川は堆積土層の状況から7区川a～cと同一の川と推定され、蛇行しながら東流し、集落の境界のような役割を担っていた可能性が高いと考える。

2 調査日誌 (第3・4区)

平成22年度

- 7月1日 第IV区域1区調査準備作業。
7月6日 第IV区域1区表土剥ぎ開始。
7月8日 器材搬入開始。
7月13日 第IV区域1区調査着手。排水作業。
7月20日 1区は包含層無し。遺構精査開始。調査区西側で井戸SK2・3を確認。
7月22日 1区東側でSD1を確認。弥生～古墳時代の土器を多く含む。
7月29日 1区SD1上層除去。若干の縄文土器も確認。SD3から横位の遺出土。
8月5日 1区SK3、SD4完掘。SK2検出。
8月6日 1区SD3・4、SX1を確認。SK1・3実測。
8月11日 台風接近中。1区SD1断面S1実測
8月18日 1区SE1検出。SD1構築面下層から灰化物を含む層を確認。縄文土器を検出。
8月20日 1区SK1～3撮影。1区全体撮影。
8月23日 1区SE1から平安時代後期の土器器種検出。SE1井戸枠実測
8月24日 1区F7・F8で落込み(8区川の左岸に相当)を確認。
8月26日 第III区域3区調査着手。
9月2日 1区全体測量。全景撮影。SD1撮影。
9月3日 1区方形周溝SX1撮影。SE1断ち割り。3区SE4検出。13世紀代のカワラケ。越前焼出土。3区SE1から曲物検出。
9月8日 台風9号接近のため作業中止。
9月16日 連日排水作業が続く。1区SE1底部板材実測。3区SK5から玉鋸出土。
9月17日 1区SE1完掘をもって1区調査終了
9月22日 3区SE3からも曲物検出。SK5完掘。
9月24日 3区SE1～3検出および図面作成。SX1・2、SE5を確認。
9月27日 3区SE2の底部から漆器。編片出土。
9月30日 3区SE1・3曲物取り上げ。SE4検出。
10月4日 3区北西側でSB6・7確認。大部分が調査区外になる。
10月6日 3区SE5検出。内部から井戸枠を検出。遺物は漆器検出。
10月8日 3区SE5撮影。SE6の内部から曲物検出。3区SX3は廃棄土坑と判断。
10月14日 第III区域2区調査着手。
10月18日 3区SE5からカワラケ、箸、下駄等出土。時期は13世紀代と推定。SB3の柱穴から弥生土器、8～9世紀代の須恵器出土。2区遺構精査。
10月27日 2区SX1確認。1区SE2から下駄の遺出土。
11月5日 2・3区全体測量。
11月10日 第II区域5区調査着手。
11月11日 2・3区全景撮影。3区SB4撮影。
11月12日 3区SB6～8撮影。2区調査終了。
11月22日 第II区域4区調査着手。遺構密度希薄。
11月18日 3区SE5埋戻し。3区調査終了。

- 11月24日 5区SE1～3、SB1、SD1検出。
12月3日 4区は現代の溝で大半を占める。
12月6日 5区SE2井戸枠実測。5区SB5・6を確認。
12月7日 4区調査終了。5区建物群の柱穴実測。
12月8日 5区SB1・2・4・5撮影。
12月13日 5区SB3撮影。24列以東の表土剥ぎ
12月16日 5区SB6・7撮影
12月21日 4・5区写真測量。5区全景撮影。
12月24日 器材等撤収準備。5区調査終了。
12月28日 事務所等撤収。平成22年度の調査終了

平成23年度

- 4月4日 第II区域6区基本測量。第IV区域8区表土剥ぎ。
4月11日 第II区域6区、第IV区域8区調査着手。6区は遺構密度希薄。8区に排水溝設定。
4月21日 6区写真測量準備。遺物取り上げ。8区I・II層除去しても遺構確認できず。
4月22日 6区完掘。全体撮影。6区調査終了。
5月10日 豪雨で8区1回目の水没。排水に2日を要する。
5月18日 8区の形状に沿って川が埋没。III層上面まで再度表土剥ぎの必要ありと判断。
5月25日 7区表土剥ぎ開始。
5月26日 8区III層上面に遺構が無いことを確認。第I区域7区調査着手。基本測量開始。
5月30日 台風2号の豪雨で8区2回目の水没。
5月31日 8区重機で再表土剥ぎ。III層上面で弥生時代後期の土器、木製品出土。
6月2日 7区SK1～3、SE1検出。
6月8日 8区作業再開。
6月9日 8区F6・F7にて川の左岸を検出。弥生時代後期の土器多数出土。
6月14日 7区SE3から「五月女」の墨書土器出土。39・38列にて川を確認。弥生時代中期の土器、磨製製石斧出土。8区V層精査。
6月24日 7区川は底面で川a～cに分かれる。
6月27日 8区川底面で木道。木製品検出。
7月6日 7区35～37列遺構精査。8区全体撮影。
7月11日 8区川のVI層から大量に縄文土器出土。
7月14日 7区川完掘。35～37列再度表土剥ぎ。
7月19日 台風6号接近。ベルコン一時撤去。
7月22日 8区調査再開。川のVI層から大珠。土偶出土
7月26日 7区SD15から「望木」の墨書土器出土。8区川VI～VII層精査。縄文土器大量に出土。
8月8日 8区排土掘出2回目完了。8区川F8のV層精査。7区SD15・16完掘。
8月19日 昨夜の豪雨で8区3回目の水没。8区の矢板が内傾し、調査区外の水田に亀裂が入る。
8月22日 7区全体測量。全景撮影。撤収準備。
8月29日 8区全体測量完了。7・8区調査終了。
8月31日 事務所等撤収。平成23年度の調査終了。



第3図 発掘調査風景



第4図 発掘調査風景

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

福井県は古代の越前國と若狭國からなり、現在の行政区分では敦賀以北を越前國、三方郡以南が若狭國に相当する。ただ、地形的には敦賀市木ノ芽峠以北を嶺北地方、以南を嶺南地方と呼ぶのが通例となっている。嶺北地方は、西部が日本海に向かって開けた広大な沖積平野となり、東部が越前中央山地や兩白山地の山塊が連なる地形となっている。この沖積平野に、東方から九頭竜川、南方から日野川の三河川が流れ込み、九頭竜川上流域に大野・勝山盆地、下流域に坂井平野、足羽川流域に狭義の福井平野、日野川流域に鯖江・武生盆地を形成している。坂井平野を含む広義の福井平野は、南北約25km、東西約25km、面積約156km²をはかり、北側には加越台地（最高所標高87.9m）が広がる。日本海に面した北西側には、坂井市三国町新保から福井市免鳥まで海岸段丘である三里浜砂丘が約12kmにわたって帯状に展開する。東方には越前中央山地（中央部最高峰一乗山標高740.9m）が南北に広がり、西方には新第三紀層でなる丹生山地（最高峰国見岳標高651.1m）を望む。

福井市は広義の福井平野のほぼ南を占め、市街中心部は東から西へ足羽川が貫いて流れている。足羽川は市街中心部から西方へ4km隔てた福井市菅谷町付近で北流する日野川と合流し、日野川は四十谷町

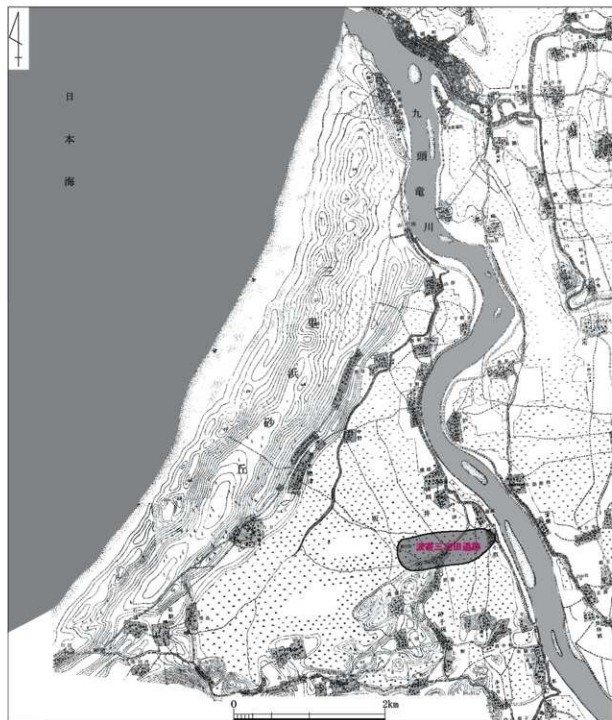
付近で九頭竜川と合流する。九頭竜川は丹生山地に遮られた後、西から北へと大きく向きを変え、左岸に国見岳を望みながら三国湊へ北流してゆく。波寄三宅田遺跡は、丹生山地の北縁に位置し、市街中心部から北西に15km隔てた波寄町に立地している周知の遺跡である（第5・6図）。

遺跡は、日野川との合流点から7.5km程下流へ下った、九頭竜川左岸の氾濫原に立地する。標高約3mをはかる丹生山地北縁の地形は、山地の裾に洪積世の丘陵が点在し、汀線沿いに発達する西側の三里浜砂丘と東側の九頭竜川に挟まれた広大な三角形の沖積地が広がり、キメの細かい灰色砂質土を基盤としている。よって、一帯は潟湖として水を湛えた時期もあったのではないかと考える。少なくとも天平神護2年(766)の『高串庄開田絵図（越前国坂井郡高串村東大寺大修多羅供分田図）』や、元禄12年(1699)の波寄村・白方村・米納津村争論図を見る限りでは、沼地・低湿地が展開していることがうかがえる。



第5図 嶺北地方の地形図（縮尺1/400,000）

「三宅=ミヤケ」の呼称は、古代では王権の直轄地や倉(クラ)を指し、波寄町南東の三宅町の地名にその名残りをとどめている。前方後円墳を含む三宅古墳群の存在は、既に古墳時代から河川を介した物資の管理を重視した有力者がいたことを暗示する。地名としては戦国期から、越前国坂南郡の郷として「三宅郷」が見られ、『真珠庵文書』、『慶長国絵図』には「三宅之郷」と記され、郷域は小尉、砂子田、藤瀬、円納、白方、横越、下野、野中、黒目、米納津に及んだとされる。近代に至ると、波寄町とともに明治22年(1889)～昭和30年(1955)までは鶴村、昭和30年(1955)から川西村と称し、昭和42年(1967)から現在の行政区分がなされた。



第6図 波寄三宅田遺跡周辺の地形図(縮尺1/50,000)(明治32年地形図を一部改変)

第2節 歴史的環境

古来より、九頭竜川は、日本海の三國湊と平野部を結ぶ物資や交通の大動脈であった。そのため、九頭竜川右岸の自然堤防上には集落遺跡が数多く展開し、左岸となる国見岳から派生する、北東側の山塊中腹部には、実に多くの古墳群が川を見守るかのように密集して構築されている。

国見岳から派生する山塊は弧状になって西方に進み、三里浜砂丘へ至るが、国見岳北西側に広がる低丘陵や微高地上においても、東側に匹敵する古墳群や遺物散布地が密集しており、遺跡の時期も縄文時代から中世にかけて幅広いことが明らかになっている。ただし、これらの遺跡は現代の生活圏と重複するため、十分な調査も行われないまま、早くに消滅してしまったものが少なくない。

ここでは波寄三宅田遺跡が縄文時代～古墳時代、古代、中世で構成されている複合遺跡であることを鑑み、これまでの発掘調査・分布調査によって内容が把握できた周辺の遺跡を概観する（第7図）。

浜島遺跡（第7図33）

福井市浜島町に所在する。福井市の北西部、三里浜砂丘が丹生山地に接続する台地の南端に立地する。昭和37年（1962）の耕地整理の工事で発見され、試掘調査が実施された。昭和51・52年（1976・1977）に、周辺一帯の古環境復元を目的としたボーリング調査が市原寿文氏によってなされた経緯がある。遺物は縄文時代前期末～後期の土器が主に採集され、周縁で弥生土器、土師器も採集された。波寄三宅田遺跡と同様の複合遺跡と考えられる。

深坂小縄遺跡（第7図34）

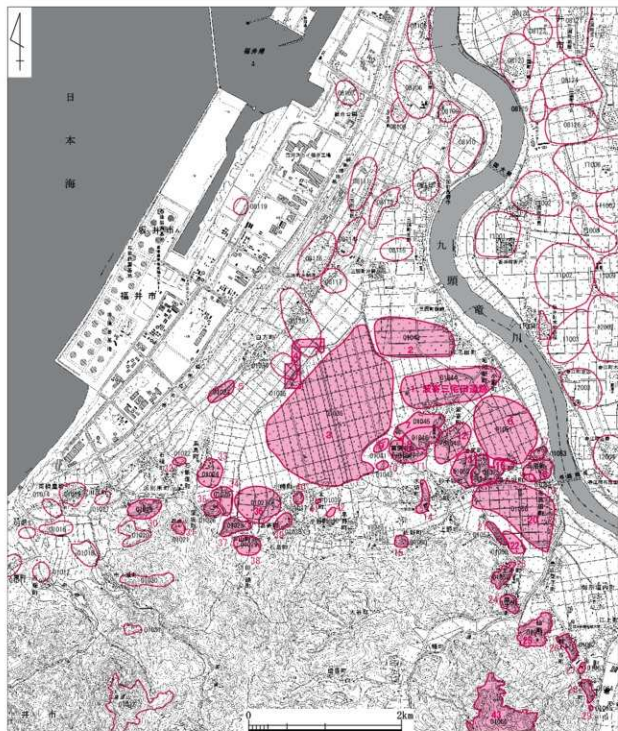
福井市深坂町に所在する。昭和56・57年（1981・1982）の基盤整備事業の工事中に発見された。あわら市教育委員会の木下哲夫氏の尽力により、広く周知されることになった。遺跡は、標高53.8mをはかる深坂山の北麓から北へ170m隔てた水田に立地する。西へ400m離れた地点には浜島遺跡が所在する。水田の排水路断面において、表土下約1mの深度で遺物包含層が確認され、耕作土の下には厚い腐植物層が堆積していることが想定されている。昭和57年（1982）8月に試掘調査を実施した結果、遺物は縄文時代前期後半に属する北白川下層各型式の土器を中心に、有孔円板、石織、石匙、磨製石斧等が検出された。

菖蒲谷遺跡（第7図11）

福井市菖蒲谷町・波寄町に所在する。波寄町から南西の菖蒲谷町一帯に広がり、波寄三宅田遺跡と同様の複合遺跡と考える。遺物が多く採集された菖蒲谷集落の北側および西側の低丘陵は、かつての菖蒲谷A・B遺跡とされる。昭和53年（1978）福井県教育委員会の分布調査で存在が確認されたが、現在では土砂採取工事で大半が消失した。遺跡は方墳5基、円墳6基からなる古墳群と、遺物採集地点のA～Fの6地点で構成され、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、玉作り関連遺物が採集され、崖面や切通し断面に竪穴住居が確認されたと報告される。成福寺の北側に位置するE地点では布目瓦、須恵器が採集され、今回の報告で掲載した。

小射遺跡（第7図6）

福井市黒丸城町に所在する。波寄三宅田遺跡の南東に近接した水田に立地する。平成24年（2012）、県埋文が一般国道416号道路改良工事に伴い、2,520㎡を調査した。調査の結果、弥生時代後期、法仏期の集落遺跡が確認された。遺構は円形の平地式住居、井戸、区画溝等が検出され、遺物は土器、石器に加え、玉作り関連遺物等が出土した。調査区は集落の端部に相当すると考えられる。遺構の覆土に炭化物や被熱した土器が含まれ、県内で数少ない火災住居として注目される。



No	県番号	遺跡名	11	01047	葛葉谷遺跡	22	01058	浄土寺遺跡	33	01024	浜島遺跡
1	01044	波寄三宅田遺跡	12	01048	波寄・嶋田遺跡	23	01059	内山梨子古墳群	34	01025	深坂小縄遺跡
2	01043	砂子田遺跡	13	01052	池尻遺跡	24	01060	内山梨子城跡	35	01026	深坂城跡
3	01036	水切・波寄遺跡	14	01049	水切古墳群	25	01061	仙古墳群	36	01027	為寄遺跡
4	01035	東大寺領高串荘跡	15	01050	佐野館跡	26	01062	剣大谷古墳群	37	01028	中山古墳群
5	01023	白方遺跡	16	01325	西松原遺跡	27	01063	大安寺古墳	38	01029	中山遺跡
6	01051	小尉遺跡	17	01053	三宅古墳群	28	01064	法土寺遺跡	39	01038	石島遺跡
7	01045	波寄古墳群	18	01054	三宅遺跡	29	01065	漆谷遺跡	40	01037	小縄遺跡
8	01046	波寄城跡	19	01055	大馬丸城跡	30	01019	浜別所遺跡	41	01039	木下遺跡
9	01041	葛葉谷中山遺跡	20	01056	西中野遺跡	31	01021	朝倉山城跡	42	01040	木下庵寺跡
10	01042	葛葉谷頭岡遺跡	21	01057	浄土寺古墳群	32	01022	石新保遺跡	43	01066	竜興寺跡

第7図 周辺の主要遺跡 (縮尺1/50,000)

みずきりこふんぐん 水切古墳群 (第7図14)

福井市水切町に所在する。3基の古墳が存在し、1号墳は径25～26mの円墳であり、埋葬施設には全長11.5mの両袖式横穴式石室を内包する。玄室はやや胴張り気味である。2号墳は南北径15.1m、東西径12.6mの円墳であり、残存長5.3mをはかる右片袖式横穴式石室を有する。3号墳は稲荷神社参道石段の脇にあり、墳丘が明確でないが、残存長2.8mの切石積み横穴式石室を有する。

古墳群は、1号墳に立つ供養塔碑文によれば貞享3年(1686)に発掘したとされ、須恵器の杯蓋1点、杯身4点、短頸壺1点、椀1点、高杯4点、平瓶2点、および金環2点が福井市砂子坂町西徳寺で保管されている。昭和45年(1970)に福井市指定史跡となり、昭和57年(1982)、福井市教育委員会が2号墳の天井石と墳丘の修復を目的として調査を実施した。

みやねこふんぐん 三宅古墳群 (第7図17)

福井市三宅町に所在する。九頭竜川左岸の標高21mをはかる独立丘陵上の北端に立地する。丘陵上一帯では縄文～古墳時代の遺物が散布しており、昭和53年(1978)福井県教育委員会の分布調査により、前方後円墳1基(1号墳)と円墳8基(2～9号墳)を確認した。1号墳は白山神社西側の丘陵頂部に構築され、全長37.5m、後円部径22.5m、前方部長15.0mをはかり、周溝を巡らす。葺石、埴輪は確認されていない。

じようじこふんぐん 浄土寺古墳群 (第7図21)

福井市浄土寺町に所在する。浄土寺町の北側尾根上に位置し、11基の古墳が存在する。平成14年(2002)福井市教育委員会が調査を実施した。古墳時代前期末から中期にかけての方墳3基、円墳1基が調査され、7・8・10号墳では埋葬施設が検出された。方墳である7号墳では埋葬施設が2基検出され、副葬品として玉類・鉄製品が出土した。円墳である10号墳では埋葬施設が1基検出され、副葬品として鉄製の武器・農具および堅櫛が出土した。その他、古墳時代前期と推定される竪穴住居および中世墓が検出された。

くさねおだにこふんぐん 剣大谷古墳群 (第7図26)

福井市剣大谷町・江上町に所在する。総数29基の古墳が存在する。平成4年(1992)福井市教育委員会が調査を実施した。1号墳は方墳であり、南北14.0m、東西12.7mをはかる。時期は弥生時代後期末から古墳時代前期と考えられる。その他、弥生時代後期の住居3基、土坑2基が検出された。

うらたにこふんぐん 漆谷遺跡 (第7図29)

福井市江上町字漆谷に所在する。九頭竜川左岸の標高20～30mの山腹に立地していた。一般国道416号道路改良工事に伴い、平成5年(1993)に県埋文が調査を実施した。

古墳時代前期および6世紀中頃から7世紀前半の古墳群と、13世紀後半から14世紀後半の配石墓と土坑墓群からなる中・近世墓群等が検出された。1号墳は円墳で、2～4号墳は山側を弧状に区画した円墳と考える。1号墳は群中の盟主墳と考えられ、横穴式石室を有し、盗掘を受けていたが、剣菱形杵葉の楕円部を鏡板に改造した馬具、玉類、工具、鉄鏝、須恵器等、豊富な副葬品が検出された。2号墳は小石室ながら多くの須恵器が副葬されていた。3号墳は2基の埋葬施設を有し、第1石室は三角形の閉塞石を伴う片袖式横穴式石室を埋葬施設としていた。第2石室は竪穴系横口式石室を埋葬施設とし、土師器椀4点と土師器壺1点が副葬されていた。1～3号墳は羨道部と玄室に段を有し、羨道部が形骸化した竪穴系横口式石室の特徴を備えており、北部九州地方の影響を強く受けて構築されたことがうかがえる。4号墳は古墳群の中で最も新しく、7世紀前半に構築された無袖の横穴式石室を埋葬施設として、

鉄、須恵器等が副葬されていた。

ほうどじいせき
法土寺遺跡 (第7図28)

福井市江上町字法土寺に所在する。漆谷遺跡と谷を挟んだ北側の山腹に立地していた。一般国道416号道路改良工事に伴い、平成6～11年(1994～1999)に県埋文が調査を実施した。遺跡は、弥生時代後期、古墳時代中～後期の墳墓および古墳群を主体とし、中世の寺院も検出された。

墳墓・古墳は総数36基を数え、後期古墳が19基確認され、いずれも横穴式石室を埋葬施設としていた。中期古墳である22号墳の埋葬施設は割竹形木棺と推定され、頭甲、肩甲、農具が検出された。中世寺院は、14世紀前後の創建と考えられ、15～16世紀にかけて大規模な造成を行い、堀切や土塁等の防御施設を整えたが、最終的には火災により廃絶したと考えられる。

しらふたいせき
白方遺跡 (第7図5)

福井市白方町に所在する。白方集落南端から南西200m隔てた三里浜砂丘上に立地する。天平神護2年(766)の『坂井郡高串村東大寺大修多羅供分田図』によって、一帯は奈良時代、東大寺領荘園高串荘が置かれたことで知られる。昭和53年(1978)、福井県教育委員会の分布調査が実施され、採砂場の断面に露出した黒色砂層から弥生時代後期末、月影期の土器が採集されている。

さのやからあと
佐野館跡 (第7図15)

福井市佐野町に所在する。『越前国古今城跡考』には、朝倉氏家臣佐野氏の屋敷跡と記載されている。東西に延びる砂丘地を利用した館跡であり、南北両側の水田との比高差は約7～8mをはかる。明治8年(1875)の地籍図には、東西約90m、南北約85mの四方の土塁を圍繞した区画が認められる。西北側の土塁の外側には幅5m、深さ1.3mの堀跡と推定される遺構が延長約21mにわたって遺存する。さらに、北方の台地際に沿って、重郭の土塁の一部が約220mも延びるとされているが、現状では確認できない。

おおくま丸じょう
大黒丸城跡 (第7図19)

福井市三宅町に所在する。九頭竜川左岸沿いの三宅古墳群の南西端に位置する。「三宅黒丸城」とも呼称される。現在は土砂採取で削られ、崖になっている。昭和36年(1961)頃の調査によれば、東辺と北辺の東半に幅5m、高さ2mの土塁と、その外側に幅4～7m、深さ約1mをはかる堀が存在したとされる。館は約70m四方をはかる単濠単郭式と推定される。

あさくらやまじょう
朝倉山城跡 (第7図31)

福井市深坂町に所在する。三里浜砂丘を北西に睥睨する朝倉山山頂に立地し、標高173.3mをはかる。昭和16年(1941)、第2次大戦中、防空監視所設置工事の際に鎌倉時代の経塚が発見され、13世紀代の珠洲焼甕、須恵質土器底部、銅製経筒破片、経巻10巻が発見された。遺物は県公民館にて保管されている。山城については、昭和61年(1986)に福井市史編さん室によって測量調査がされた。『越前国古今城跡考』によれば、朝倉玄蕃助景運の城とされ、天正3年(1575)には信長の侵攻に対して一揆勢が立て籠もったとされる(『朝倉始末記』)。本丸は東西20m、南北23mの規模で、西から南にかけて幅3mの土塁が巡る。本丸の東には東西15m、南北40mの二の丸とされる郭が配置されている。本丸の北から西にかけては幅12mの帯郭が延びている。中世から近世の過渡期の城と位置付けられている。

第3章 遺構

第1節 第I区域の遺構 [図版第1～3]

1 第I区域の概観(第8・9図)

第I区域は、Q32～U44までの7区にあたり、全調査区の西側にあたる。32列に所在する現代の排水路を持って、第II区域との区域分けを行った。

第I区域にあたる7区の中央部およびその東側には、7区川a～cおよび7区SD15・16が南東から北西にかけて展開し、第I区域を東西に画している。区域全域には、7区川a～cおよび7区SD15・16に併行、および交差する形で、幅の狭い溝状遺構が多数存在する。これらの溝状遺構は近代以降の耕地に伴う掘削痕(耕作痕)と考えられる。加えて、近代以降の開発行為に伴う削平により、第I区域では遺物包含層の大部分が失われており、遺物は遺構からの出土が大半を占める。遺構検出面は地山である黄褐色土層の上面ではあるが、削平の影響を考慮すると本来の遺構構築面はもう少し高かったものと推定される⁽¹⁾。

第I区域の主要な遺構の多くは、7区川a～c以西に展開する。検出された主な遺構は井戸と土坑であり、7区川a～c以西に集落の居住域が形成されていたことがうかがわれる。しかしながら、多くの柱穴が検出されたものの、掘立柱建物等の復元には至っていない。削平の影響もあるかもしれないが、7区川a～c以西は居住域の縁辺部にあたるものと推定される⁽²⁾。

一方の7区川a～c以東についても、井戸と推定される遺構が検出されたものの、全体的に遺構の密度が希薄であり、先に述べた溝状遺構が多数を占める。このことから、7区川a～c以東は居住域間の空閑地であったものと考えられる。

2 遺構の概要(第10・11図、第1表)

1) 土坑(第10図)

7区で検出した主要な土坑の多くは、調査区の西半部に位置する。

7区SK1(第10図)は、7区の西側S43に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、底面は起伏を有する。掘方の断面形は、壁面の立ち上がりが緩やかな浅皿状をなす。

7区SK2(第10図)は、7区の西端T43・T44に位置する。調査区の西壁際で検出したため、遺構の西側の一部は調査区外となる。平面形は、東西に長軸を有する不整な長方形を呈するものと推定される。掘方の断面形は、裾がすばまる逆台形状をなす。遺構内からは、弥生土器が出土している。遺構の形状から、土坑墓の可能性がある。

7区SK3(第10図)は、7区の西側S42に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は壁面の立ち上がりが緩やかな浅皿状をなす。土坑底面からは、炭化材が出土する。また、遺構内からは、弥生土器が出土している。

7区SK4(第10図)は、7区の西側T41に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は丸みをおびた浅皿状をなす。遺構内からは、弥生土器が出土している。

2) 井戸(第10・11図)

7区SE1(第10図)は、7区の西側T43に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾が広がる袋状をなす。3層の存在から、掘方壁面の崩落によって断面形が袋状になったものと考えら

れる。遺構内からは、弥生土器が出土している。

7区SE2（第10図）は、7区の西側S41に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は裾が若干すばまる逆台形状をなす。堆積土層の下層から、骨片や桶底板等の木製品が出土している。その他、遺構内からは須恵器が出土している。

7区SE3（第10図）は、7区の西側T42に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすばまる逆台形状をなす。堆積土層の下層（5層）より、「五月女」と墨書された須恵器が出土している。

なお、7区川a～c以东のS33・S34に位置する7区P84（第11図）は底部に曲物枠が据えられていることから、この遺構も井戸であった可能性がある。7区P84の曲物枠は、径約0.58m、高さ約0.15mをはかる。同じく、Q33・R33に位置するP82（第11図）、S34に位置するP83（第11図）も、P84と同規模の遺構であることから井戸の可能性がある。

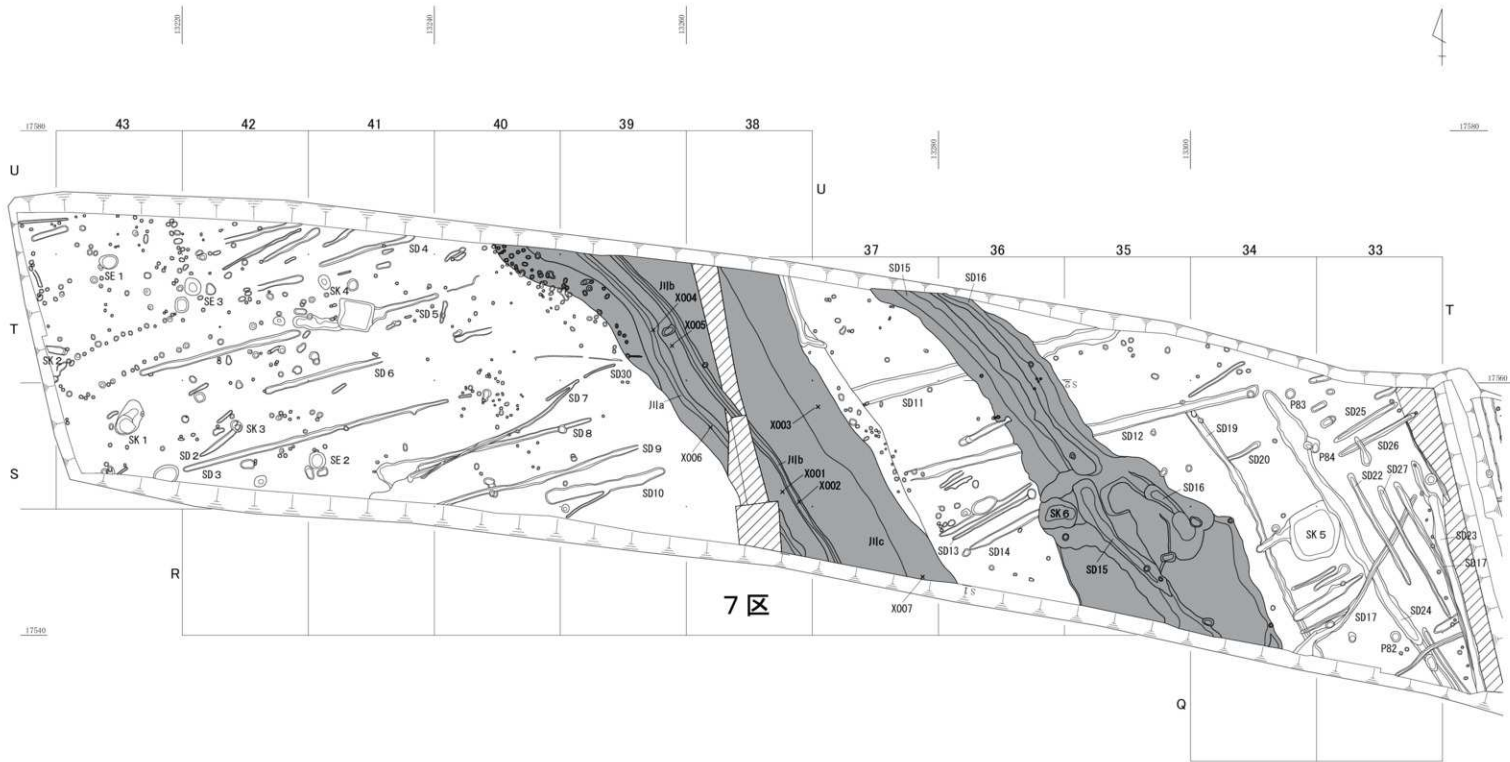
3）川（第9・11図）

7区川a～c（第9・11図）は7区の中央部R36～U40に位置し、南東から北西にかけて展開する。幅約10.28～13.28mをはかる7区川cが主体となるが、西側底部に狭小な溝状の流路（7区川a・b）が形成されている。川aは幅約1.10～2.04m、7区川bは幅約0.56～0.94mをはかる。なお、底部中央から東側にかけても緩やかに落ち込むことから、当初は東側に本流と言うべき流路があり、西側に本流から分流した流路（7区川a・b）が形成されたと考えられる。なお、7区川bは38列の擾乱（現代の排水路跡：図の斜線部分）より西側では幅が広いものの、38列の擾乱より東側では幅が狭くなる。底面は比較的平坦であり、7区川cの底面の標高は約1.80～1.86m、7区川aの底面の標高は約1.74～1.81m、7区川bの底面の標高は約1.74～1.98mとなる。高低差は7区川cで約0.06m、7区川aで約0.07m、7区川bで約0.24mとなる。各流路の底面は川cでは南東側がやや高く、川aでは多少の起伏はあるが平坦に近く、川bでは中央付近が低くなる傾向をみせる。堆積土層は4層からなり、このうち3層には黒色味の強い粘質土が堆積する。3層の形成については、一時的に流量が減少して、流れの強い流水にさらされなかったことが要因と考えられる。最下層の4層からは弥生時代から平安時代の土器が出土しており、このことから川が機能していた時期は、少なくとも平安時代までは遡及できる（第9・11図X001～X007）。

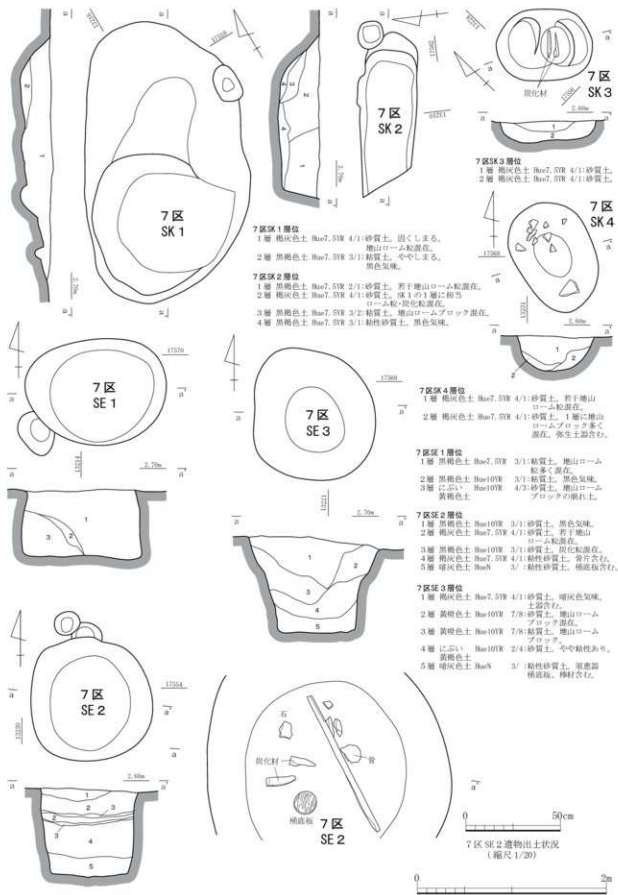
7区SD15・16（第9・11図）は、7区の東側Q34～T37に位置し、7区川a～cに併行するように南東から北西にかけて展開する。当初は溝と認識していたが、調査の進捗により自然の流路（川）であることが判明した。幅約4.12～12.60mをはかり、北西半は底部に2条の溝状の流路が展開するが、南東半は上端部が幅広となって先の2条の流路が一体化し、さらに底面も起伏に富むようになる。なお、北側の端部が西方に向かうように弧を描くことから、隣接する7区川a～cと調査区外で接する可能性があり、両遺構が同一の河川である可能性も否定できない。7区SD15の底面は標高約1.97～2.27mをはかり、一部落ち込む箇所があるものの、全体的に標高2.20m前後をはかる。7区SD16の底面は標高約2.01～2.38mをはかり、一部落ち込む箇所があるものの、全体的に南東側の標高が高い傾向をみせる。遺構内からは、須恵器等が出土している。



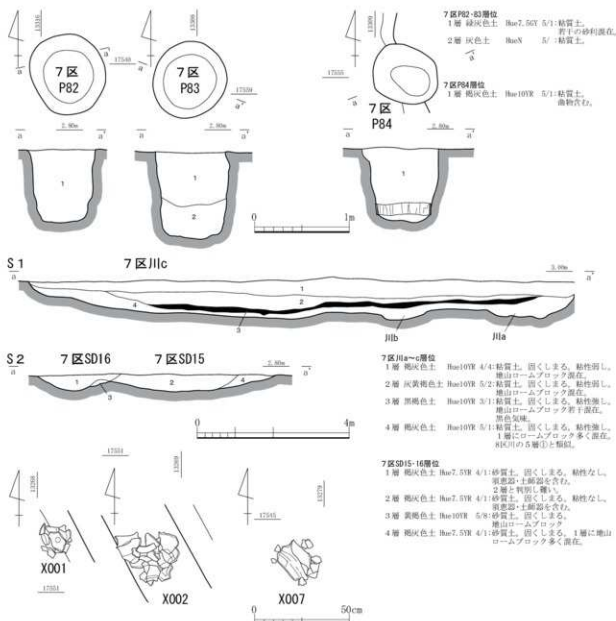
第8图 第I~IV区域遺構全体図 (縮尺1/1,000)



第9図 第1区域 7区遺構全体図 (縮尺1/300)



第10図 第1区域 7区SK 1~4、SE 1~3 (縮尺1/40)



第11図 第1区域 7区P82~84 (縮尺1/40)、川a~c・SD15・16 (縮尺1/100)、X001・002・007 (縮尺1/20)

第1表 第1区域遺構観察表

【土坑】

位置	種類	規模 享切面積	形状	時期	特徴	遺物	特徴
7区 949	第10区	長軸 長: 2.90m 短軸 長: 1.70m	—	—	—	—	7区の西側に位置する。主軸は、N30°Eを向く。底面は起伏を有し、東方の断面はほぼ直線状をなす。溝壁上部は、褐色土および黒褐色土である。
7区 T41・T44	第10区	長軸 長: 1.70m以上 短軸 長: 0.94m	—	弥生時代	—	—	7区の西側、溝底部の西側に位置する。主軸は、N80°Wを向く。底面は平坦であり、東方の断面は起伏を有する。溝壁上部は、黒褐色土および褐色土である。西面は調査区外へのびる。土壌層の連続性があり、弥生時代中期の上層に相当する。
7区 942	第10区	長軸 長: 1.57m 短軸 長: 0.90m	—	弥生時代	—	—	7区の西側に位置する。主軸は、N47°Wを向く。底面はほぼ起伏を有し、東方の断面はほぼ直線状をなす。溝壁上部は、褐色土である。西側断面は不規則だが、7区SD2と切り合う。同材料出土する。
7区 T41	第10区	長軸 長: 1.33m 短軸 長: 0.67m	—	弥生時代	—	—	7区の西側に位置する。主軸は、N24°Wを向く。底面は平坦部が丸みをおいて緩やかに深くなる。東方の断面はほぼ直線状をなす。溝壁上部は、褐色土である。弥生時代中期の上層に相当する。
7区 944	第10区	長軸 長: 1.30m 短軸 長: 0.70m	—	弥生時代	—	—	7区の西側に位置する。主軸は、N24°Wを向く。底面は平坦部が丸みをおいて緩やかに深くなる。東方の断面はほぼ直線状をなす。溝壁上部は、褐色土である。弥生時代中期の上層に相当する。

第2節 第Ⅱ区域の遺構

【井戸】

位置 遺構	標記 享和区域	形質		時期		遺物	特徴
		(m)		構造			
77K T43	第10区	長	幅：1.50m	掘	深：1.12m	弥生時代	赤土土層
77L T42	第10区	長	幅：1.50m				
77K S41	第10区	長	幅：1.40m	掘	深：1.20m	古代	赤土土層 縄文遺構
77L T42	第10区	長	幅：1.30m				
77K T43	第10区	長	幅：1.60m	掘	深：1.60m	縄張り井戸	赤土土層
77L T42	第10区	長	幅：1.60m				
77K S41	第10区	長	幅：1.40m	掘	深：1.20m	古代	赤土土層 縄文遺構
77L T42	第10区	長	幅：1.30m				
77K S43	第10区	長	幅：1.50m	掘	深：1.62m	縄張り井戸	赤土土層
77L T42	第10区	長	幅：1.50m				

【ピット】

位置 遺構	標記 享和区域	形質		時期		遺物	特徴
		(m)		構造			
77K Q20・R23	第11区	長	幅：長：0.80m	掘	深：0.79m	---	---
77L P82	---	長	幅：0.77m				
77K S34	第11区	長	幅：長：0.84m	掘	深：0.94m	---	---
77L P83	---	長	幅：0.94m				
77K S33・S34	第11区	長	幅：長：0.72m	掘	深：0.72m	---	---
77L P81	---	長	幅：0.72m				

【祠・溝】

位置 遺構	標記 享和区域	形質		時期		遺物	特徴
		(m)		構造			
77K 第9-U10	第9・11区	上	幅：幅：10.28～11.28m	掘	深：0.59～0.73m	弥生時代 古代	赤土土層
77L 川上e	第9区 (1)～(9)	下	幅：幅：4.44～7.80m				
77K 第9-U10	第9・11区	上	幅：幅：4.17～11.40m	掘	深：0.10～0.68m	古代	赤土土層 土層 古瓦
77L 第9-U10	第9区 (1)	下	幅：幅：3.16～7.28m				

第2節 第Ⅱ区域の遺構 [図版第4～8(1)]

1 第Ⅱ区域の概要(第8・12図)

第Ⅱ区域は、O20～R32までの5・6区にあたり、全調査区のはほぼ中央部にあたる。第Ⅱ区域は、5区SD1によって東西に画されており、さらに28列以東には東西および南北に展開する幅の狭い溝状遺構が多数存在する。複数の溝状遺構が同一方向に併行して設けられていることから、これらの溝状遺構は第Ⅰ区域と同じく耕地に伴う掘削痕(耕作痕)と考えられる。また同様に、近代以降の開発行為に伴う削平により、第Ⅱ区域では遺物包含層が失われており、遺物は遺構からの出土にとどまる。遺構検出面は地山である黄褐色土層の上面であるが、削平の影響を考慮すると本来の遺構構築面はもう少し高かったものと推定される。

検出された主な遺構は、掘立柱建物・井戸・土坑・溝等である。特に、掘立柱建物は建物の桁行の方向を揃えた複数棟がまとまり持って、一定の間隔をあけながら東西に展開する様相を見せている⁽³⁾。また、建物群を画するように、第Ⅱ区域の中央部には5区SD1が設けられている。井戸は第Ⅱ区域の西側に検出している。掘方が大きく、弥生時代に属する井戸も存在する。なお、掘立柱建物については、柱穴から出土する遺物が僅少であったため、その帰属時期を明確にとらえることができなかったが、柱穴の規模や建物の桁行方向が異なるため、その違いが時期差を示している可能性が指摘できる。

2 遺構の概要 (第13～19図、第2・5・6表)

1) 掘立柱建物 (第13～17図)

掘立柱建物が多数構築されており、さらに5区SD1によって掘立柱建物が東西の二群に画される。5区SB1～4・8～10の西群(以下、II A群と称する)と、5区SB5～7・6区SB1の東群(以下、II B群と称する)に大きく分けることができる。

II A群は、さらに5区SB1・2のII A群①と、5区SB3・4・8～10のII A群②の二つのグループに分けられる。

II A群①では、中型の総柱建物1棟(5区SB1)と大型の側柱建物1棟(5区SB2)から構成される。建物の配置は、5区SB1に桁行方向がほぼ直交する形で5区SB2が設けられている。

5区SB1(第13図)は、5区の西側R31・R32・S31・S32に位置する、桁行3間×梁行2間の総柱建物であり、桁行長約4.60m、梁行長約3.64mをはかる。柱穴の平面形は、不整な長方形および方形を呈する。一部の柱穴内からは、須恵器が出土している。

5区SB2(第13図)は、5区の西側Q30・Q31・R31に位置する。桁行5間×梁行2間の側柱建物であり、桁行長約9.88m、梁行長約4.60mをはかる。四辺の柱穴列では、対面する柱穴数が異なっており、桁行では東側柱穴列では5間、西側柱穴列では4間となる。一方、梁行では北側柱穴列では1間、南側柱穴列では2間となる。なお、建物中央南側の梁行方向に柱穴14・15が設けられており、建物内を南北に画する間仕切り等が存在した可能性がある。建物の南西隅の柱穴6は事前に掘削した排水溝によって切られており、一部のみの検出となった。柱穴の平面形は、不整な方形および楕円形を呈する。一部の柱穴内からは、須恵器が出土している。

II A群②は、小型の側柱建物1棟(5区SB10)、中型の側柱建物3棟(5区SB3・4・8)、規模不明の建物1棟(5区SB9)から構成される。5区SB3と5区SB8が、5区SB4と5区SB10が重複する。

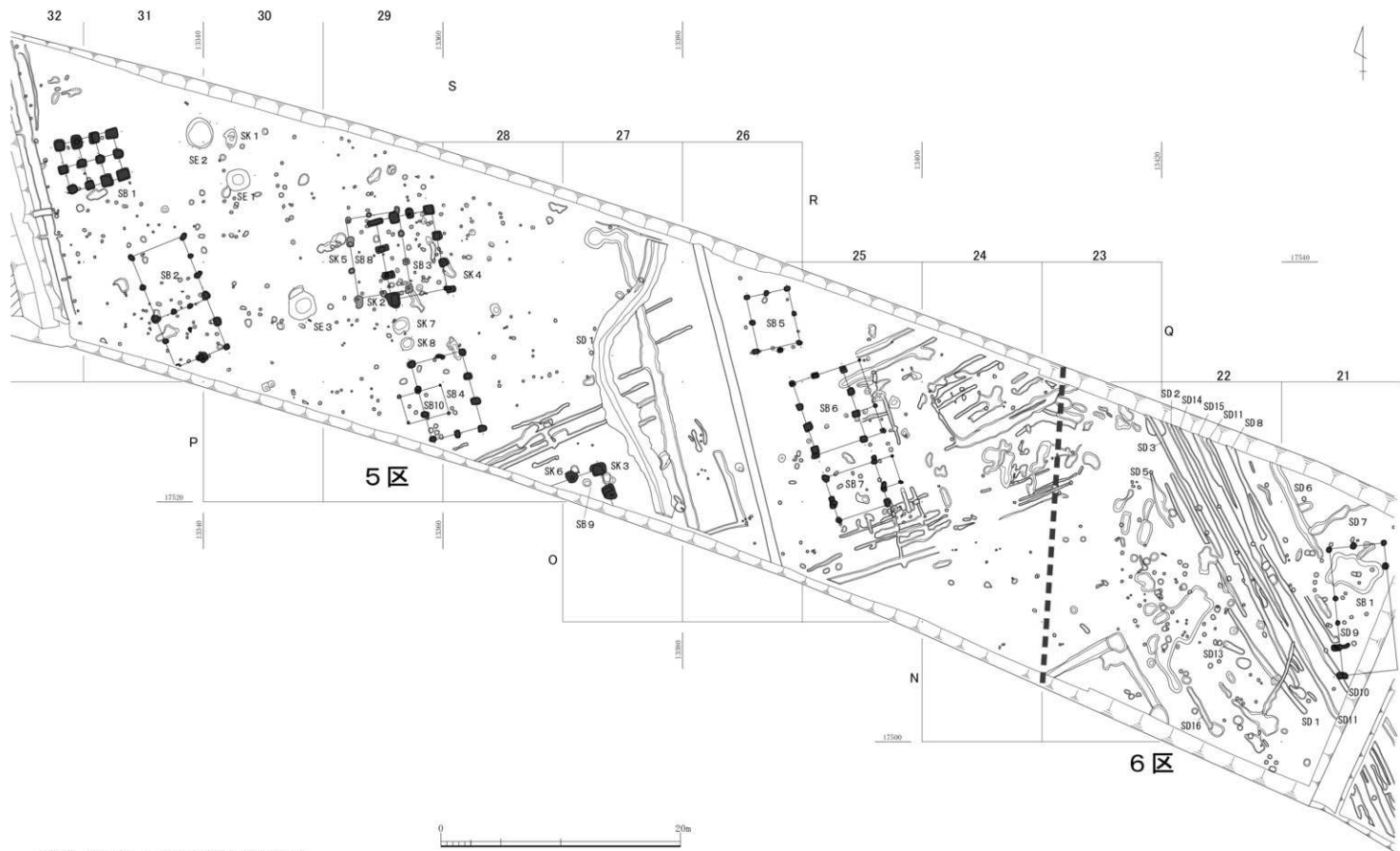
5区SB3と5区SB4はほぼ同規模の建物であり、桁行方向をほぼ揃えて南北に配置される。5区SB8は5区SB3の西側に重なる形で位置し、桁行方向も5区SB3とほぼ揃うように南北に配置する。5区SB10は5区SB4の西側に重なる形で位置し、桁行方向は5区SB4と直交するように東西方向となる。5区SB4の南東側の調査区壁際には、5区SB9が一部検出されており、大型の柱穴が鉤の手状に配置されている。5区SB9は、柱穴の掘方が他の柱穴よりも大きく、その規模は5区SB1に類似する。このことから5区SB9は、5区SB1と同じく総柱建物になる可能性がある。

5区SB3(第14・18図)は、5区の中央部西寄りQ28・Q29・R28・R29に位置する。桁行3間×梁行3間の側柱建物であり、桁行長約6.84m、梁行長約4.70mをはかる。南北辺の柱穴列では北側柱穴列が3間なのに対して、南側柱穴列では1間となる。柱穴の平面形は不整な長方形および方形を呈し、南東隅の柱穴5には柱根が遺存していた。一部の柱穴内からは、須恵器が出土している。

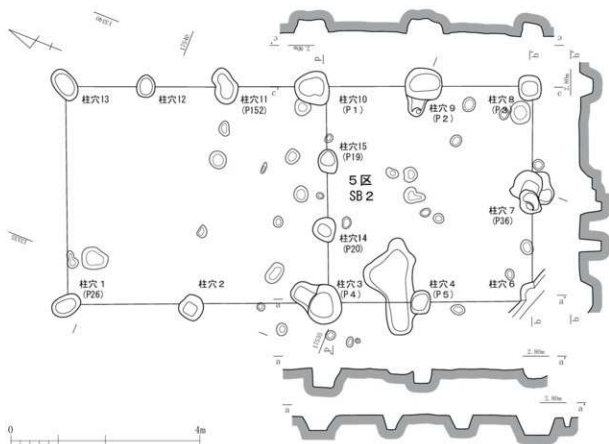
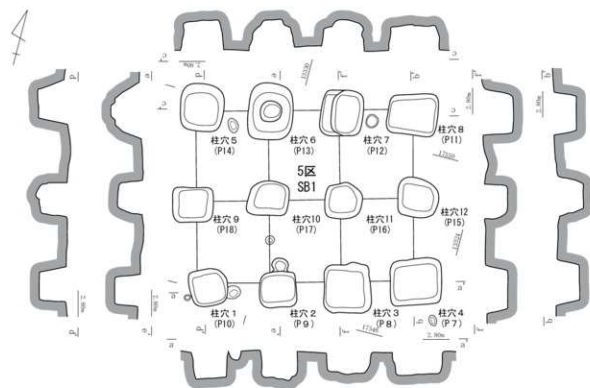
5区SB4(第14図)は、5区の中央部西寄りP28・P29・Q28・Q29に位置する。桁行3間×梁行2間の側柱建物であり、桁行長約6.54m、梁行長約4.26mをはかる。柱穴の平面形は、不整な方形および円形を呈する。一部の柱穴内からは、須恵器が出土している。

5区SB8(第16図)は、5区の中央部西寄りQ29・R29に位置する。桁行3間×梁行2間の側柱建物であり、桁行長約6.64m、梁行長約4.30mをはかる。柱穴の平面形は、不整な方形および円形を呈する。

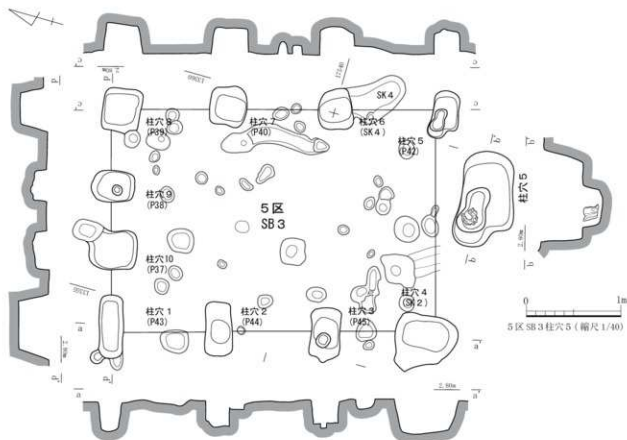
5区SB9(第16図)は、5区の中央部南側O27・P27・P28に位置する。建物の北東隅にあたる3基の柱穴のみの検出であったため、全体の規模は不明である。南北方向を桁行と仮定すると、桁行長2.62



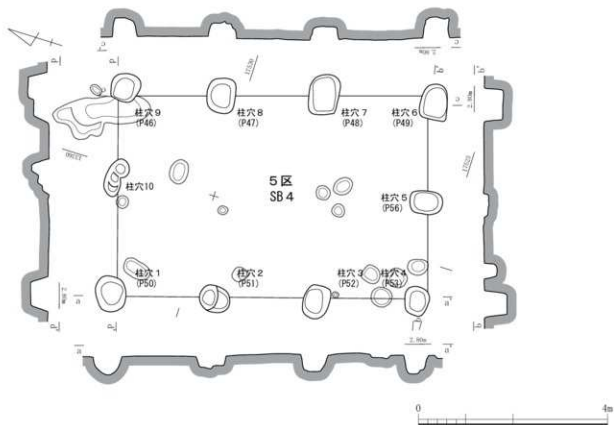
第12図 第II区域 5・6区遺構全体図 (縮尺1/300)



第13圖 第Ⅱ区域 5区SB1・2 (縮尺1/80)



5区SB3柱穴5 (縮尺1/40)



第14圖 第II区域 5区SB3・4 (縮尺1/80)

m以上、梁行長2.36m以上をはかる。柱穴の平面形は、不整な長方形および方形を呈する。柱穴の規模から判断すると、5区SB1と同様の総柱建物になるものと推定される。なお、建物の北東隅にあたる柱穴2からは、礎板と推定される板材が出土している。礎板は長さ約0.93m、幅約0.12～0.14mをはかる。端部の一端に「ほぞ穴」の痕跡が認められることから、建築部材から転用したものと考えられる。この礎板上には柱根の痕跡を示す土層（1層）が認められ、その幅から最大で径約0.27mをはかる柱根が復元できる。堆積土層の2～5層が柱の根固め（裏込め）の土層と考えられる。

5区SB10（第17図）は、5区の中央部西寄りP28・P29に位置する。桁行1間×梁行1間の側柱建物であり、桁行長約3.48m、梁行長約2.48mをはかる。柱穴の平面形は、不整な円形を呈する。

ⅡB群はⅡA群と同じく、その配置状況から二つのグループに分けることができる。ⅡB群①は5区SB5～7、ⅡB群②は6区SB1である。

ⅡB群①は、中型の側柱建物3棟（5区SB5・6・7）から構成される。

5区SB6および5区SB7は南北に並ぶように配置しており、ともに東側に庇もしくは下屋等の附属施設を設けている。両建物の東西柱穴列の柱筋がほぼ揃うことから、一つの長大な建物であった可能性もある。5区SB5は、5区SB6の北西方に位置する側柱建物である。

5区SB5（第16図）は、5区の東側Q26に位置する。桁行2間×梁行2間の側柱建物であり、桁行長約4.64m、梁行長約3.56mをはかる。柱穴の平面形は、不整な長方形および楕円形を呈する。なお、南側柱穴列の柱穴4は、柱筋から外れて南側に若干張り出す位置に設けられている。

5区SB6（第15図）は、5区の東側P25・P26・Q25・Q26に位置する。桁行3間×梁行2間の側柱建物であり、東側には庇もしくは下屋等の附属施設を設ける。主屋は桁行長約6.30m、梁行長約4.32mをはかり、附属施設は南北長約6.30m、東西長約1.64mをはかる。主屋の柱穴の平面形は不整な長方形および方形を呈し、柱穴7・柱穴9には柱根が遺存していた。附属施設の柱穴は主屋の柱穴に比して規模が小さく、平面形は不整な円形を呈する。一部の柱穴内からは、須恵器が出土している。

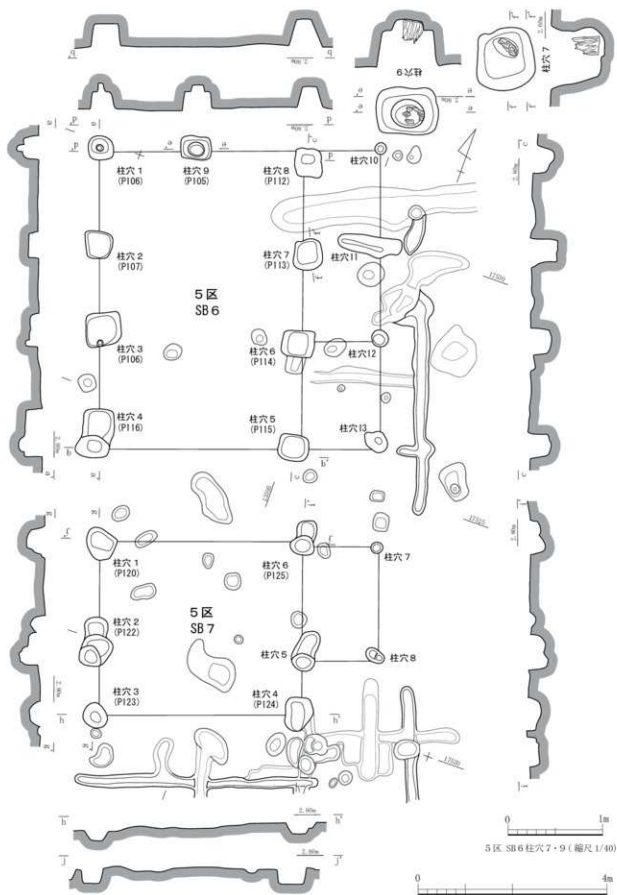
なお、5区SB6の東側において、桁行方向に併行する形で細い溝を検出している。建物との位置関係から雨落ち溝の可能性はある。

5区SB7（第15図）は、5区の東側O25・P25に位置する。桁行1間×梁行2間の側柱建物であり、東側には庇もしくは下屋等の附属施設を設ける。主屋は桁行長約4.28m、梁行長約3.66mをはかり、付属施設は南北長約2.38m、東西長約1.62mをはかる。主屋の柱穴の平面形は、不整な楕円形および円形を呈する。付属施設の柱穴は主屋の柱穴に比して規模が小さく、平面形は不整な円形もしくは楕円形を呈する。一部の柱穴からは、須恵器が出土している。

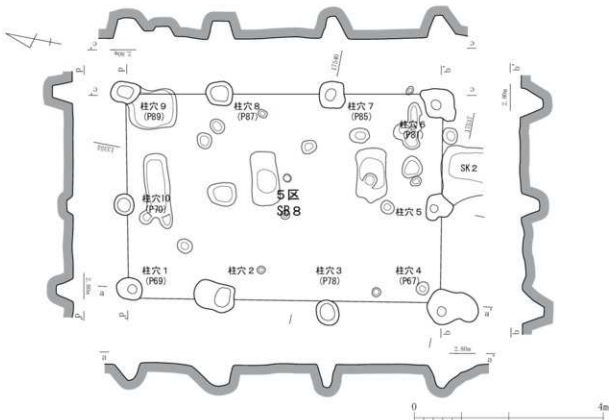
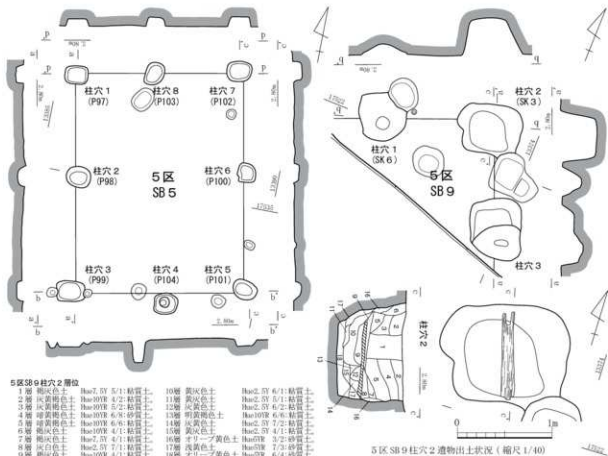
なお、5区SB7の東側および南側において、桁行方向および梁行方向に併行する形で細い溝を検出している。建物との位置関係から雨落ち溝の可能性はある。

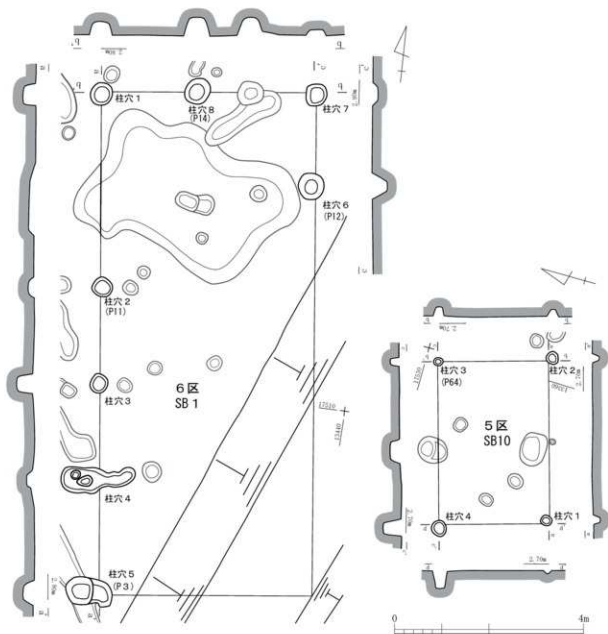
ⅡB群②は、大型の側柱建物である6区SB1の1棟から構成される。6区SB1以西においても多数の柱穴が検出されているため建物が存在した可能性があるものの、建物の復元には至っていない。

6区SB1（第17図）は、6区の東端N21・O21に位置する。桁行5間×梁行2間の側柱建物である。建物は西側約2/3程度を検出したにとどまり、建物の南東隅は調査区外に展開する。検出した範囲ではあるが、桁行長約10.56m、梁行長約4.62mをはかる。攪乱により柱穴が存在しない箇所もあるが、柱穴の平面形は不整な楕円形および円形を呈する。一部の柱穴からは、須恵器が出土している。



第15圖 第II区域 5区SB6・7 (縮尺1/80)





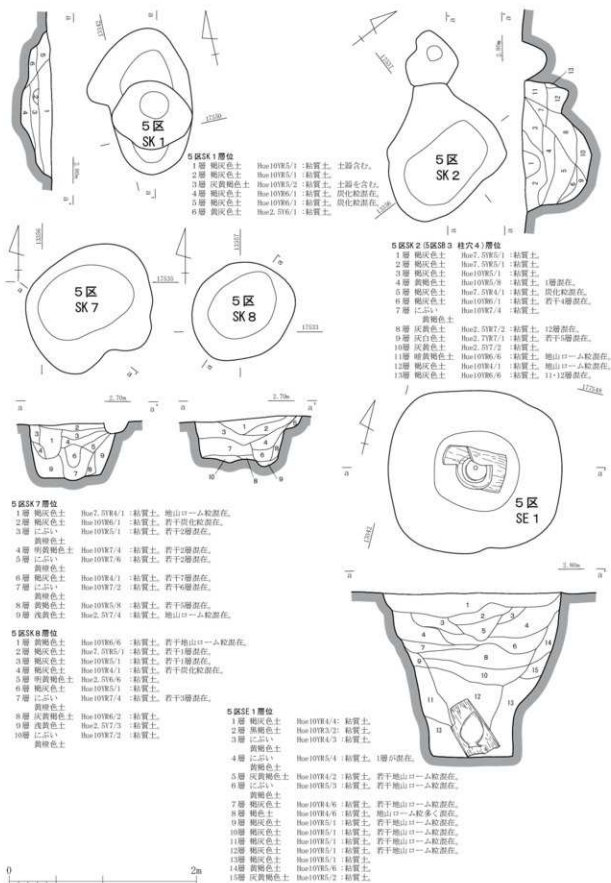
第17図 第II区域 5区SB10、6区SB1 (縮尺1/80)

2) 土坑 (第18図)

5区SK 1 (第18図) は、5区の西側R30・S30、5区SE2の東側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。掘方の断面形は浅皿状をなし、底面は中央部が浅くくぼむ。遺構内からは、磨滅のため不明確だが弥生土器と推定される土器が出土している。

5区SK 2 (第18図) は、5区のSB3の柱穴4にあたる。遺構検出時は土坑として扱っていた。

5区SK 7 (第18図) は、5区の西側Q29、5区SB3の南側に位置する。位置的には5区SB3の西側柱穴列の柱筋の延長上に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。土層断面の観察の結果、柱根を据えた痕跡と推定される土層を確認した。1層および6・7層がその痕跡であり、堆積状況から6・7層が古く、1層が新しいと考えられる。7層が柱根の根固めの



第18図 第Ⅱ区域 5区SK1・2・7・8、SE1 (縮尺1/40)

土層とするならば、6層が柱根腐朽後の堆積土層と考えられ、柱根径は約0.15mに復元できる。1層も柱根腐朽後の堆積土層とするならば、柱根径は約0.23mに復元できる。先に述べたように、5区SK7は5区SB3の西側柱穴列の柱筋の延長に位置することから、関連する遺構の可能性はある。

5区SK8（第18図）は、5区の西側Q29、5区SK7の南側に位置する。また、5区SB4の西側柱穴列の延長上に位置するが、桁行の柱筋からはやや外れる。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすばまる逆台形状をなす。土層断面の観察の結果、柱根を据えた痕跡と推定される土層を確認した。4・6層が柱根腐朽後の堆積土層と考えられ、柱根径は約0.20mに復元できる。

3) 井戸（第18・19図）

5区SE1（第18図）は、5区の西側R30に位置する。平面形は不整な円形を呈する。掘方の断面形は裾がすばまる逆台形状をなし、底面は平坦である。さらに、底面において径約0.36m、高さ約0.62mの木製列り貫き桶が西方に傾いた状態で検出した。列り貫き桶の上半部の一部は欠損する。この列り貫き桶は井戸枠として設置されたものであり⁽⁴⁾、堆積土層の11・13層が裏込めの土層と推定される。列り貫き桶の内部には弥生土器の壺が倒立した状態で据えられていた。井戸廃絶時の儀礼的行為として、列り貫き桶を斜めに倒し、上部の一部を除去したうえで、内部に土器を納めたものと考えられる。

5区SE2（第19図）は、5区の西側R30・R31・S30・S31に位置する。平面形が不整な円形を呈する。掘方の断面形は裾がすばまる逆台形状をなし、底面は中央に向かって緩やかにくぼむ。底面の中央に幅約0.50～0.60mの板材を方形に組んで井戸枠とし、その周囲には幅約0.10～0.30m、長さ約0.30～1.10mの板材を敷きならべている。板材には、側縁に欠き込みを有するものや、隅を斜めに切り落としたものがあり、建築部材を転用したものと考えられる。この敷き板材は、底面中央の方形板組の井戸枠内に濁水が流入しないように設けられた可能性がある。

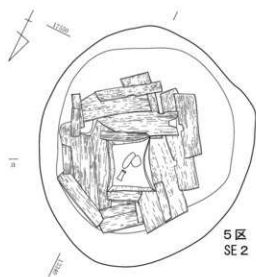
敷きならべた板材の中央には、縦板で方形に組んだ井戸枠が据えられている。土圧によって変形が顕著なため本来の法量は判然としないが、各辺の幅は、北辺が約0.53m、南辺が約0.46m、東辺が約0.55m、西辺が約0.60mをはかる。高さは遺存値で、約0.55mをはかる。

土層断面の観察の結果、乱れてはいるが9～11層が井戸内部に堆積した土層、その他が井戸枠設置後の裏込めの土層と推定される。井戸枠は、約0.55mの高さまでしか遺存していないが、先の9～11層を参照にすると井戸内部の底面からの高さが約1.10mまで復元は可能であるが、この高さまで井戸枠が存在したかは不明である。

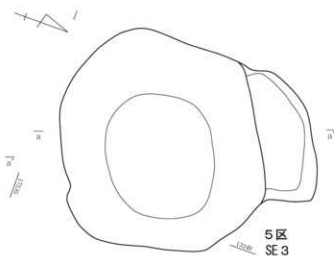
5区SE3（第19図）は、5区の西側Q30、5区SB2と5区SB8の間に位置する。平面形は、主要部分は不整な六角形を呈するが、北側に浅い掘り込みの張り出しを有する。掘方の断面形は、裾がすばまる逆台形状をなす。遺構内からは、須恵器等が出土している。

4) 溝（第12・19図）

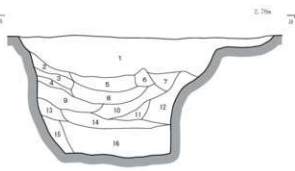
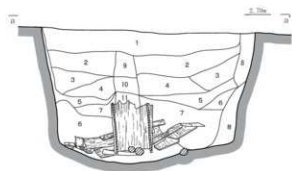
5区SD1（第12・19図）は、5区の中央部27列に位置する。調査区内で検出した延長は、直線距離で約23.4mをはかる。Q27において西側に張り出す形で蛇行し、P27では東側にわずかに膨らむ形で蛇行する。P27での蛇行は、西側に5区SB9が存在することから、これにより規制を受けた可能性も指摘できる。溝の掘方の断面形は、上方が大きく開いた逆台形状をなすものの、一部では壁の中程に屈曲部を設け、屈曲部の下位が上位よりも立ち上がり急傾斜となる箇所がある。底面は平坦であり、標高は約2.12～2.19mをはかり、高低差は約0.07mと小さい。遺構内からは、須恵器が出土している。



5区
SE 2



5区
SE 3



5区SE3層位

- | | | | | |
|-----|-------|-------------|-----|-------------|
| 1層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 2層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | 若干1層混在。 |
| 3層 | 黄褐色土 | Bsu10YR 5/6 | 粘質土 | 若干1層混在。 |
| 4層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | |
| 5層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | |
| 6層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | |
| 7層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 8層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | 堆山口一ム粒多ク混在。 |
| 9層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 5/2 | 粘質土 | 堆山口一ム粒多ク混在。 |
| 10層 | 赤褐色土 | Bsu10YR 3/1 | 粘質土 | |
| 11層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 5/2 | 粘質土 | 若干1層混在。 |
| 12層 | 黄褐色土 | Bsu10YR 5/6 | 粘質土 | 若干1層混在。 |
| 13層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 5/2 | 砂質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 14層 | 黄褐色土 | Bsu10YR 4/1 | 粘質土 | 若干14層混在。 |
| 15層 | 黄褐色土 | Bsu10YR 5/1 | 砂質土 | 14層混在。 |
| 16層 | 黄褐色土 | Bsu10YR 4/1 | 粘質土 | 11層混在。 |

5区SE2層位

- | | | | | |
|-----|-------|-------------|-----|-------------|
| 1層 | 明黄褐色土 | Bsu2.5Y 7/6 | 粘質土 | |
| 2層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 5/2 | 粘質土 | 若干1層混在。 |
| 3層 | 赤褐色土 | Bsu2.5Y 6/4 | 粘質土 | 若干6層混在。 |
| 4層 | 赤褐色土 | Bsu2.5Y 7/4 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 5層 | 明黄褐色土 | Bsu2.5Y 6/6 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 6層 | 灰白色土 | Bsu10YR 7/1 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 7層 | 明褐色土 | Bsu2.5Y 7/1 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 8層 | 灰黄褐色土 | Bsu2.5Y 7/4 | 粘質土 | 堆山口一ム粒多ク混在。 |
| 9層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 6/2 | 粘質土 | |
| 10層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 5/2 | 粘質土 | 若干灰化層混在。 |
| 11層 | 黄褐色土 | Bsu2.5Y 6/1 | 粘質土 | 若干灰化層混在。 |

5区SD1

5区SD1層位

- | | | | | |
|----|-------|-------------|-----|-------------|
| 1層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 4/2 | 粘質土 | 堆山口一ム粒多ク混在。 |
| 2層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 4/2 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 3層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 4/2 | 粘質土 | 若干堆山口一ム粒混在。 |
| 4層 | 灰黄褐色土 | Bsu10YR 4/2 | 粘質土 | 赤褐色土多ク混在。 |
| 5層 | 黄褐色土 | Bsu10YR 4/1 | 粘質土 | 堆山口一ム粒多ク混在。 |

0 2m

第19圖 第Ⅱ区域 5区SE2・3、SD1 (縮尺1/40)

【表】

位置	標記	規模	時期	遺物	特徴
遺構	等尺図	(m)	構造		
3区 O30~E30 D1	第12・19区	上 端 幅 : 1.12~2.14m	古代	弥生前期	3区の中央部に位置する。概行しながら南方向に展開する。遺物は平常であり、鋳物の銅貨等は認められず。調査区内で検出した遺物は、軒高4mをはかる。礎石土層は、灰黄褐色土および暗灰色土である。礎石土層中からは、弥生前期・土器類が出土する。礎石部の一部には、礎石も認められる。
		深 度 : 0.20~0.47m			
		下 端 幅 : 0.20~0.23m			
			遺構+遺		

第3節 第Ⅲ区域の遺構 [図版第8(2)~12]

1 第Ⅲ区域の概要(第8・20図)

第Ⅲ区域は、L9~M21までの2・3・4区にあたり、全調査区の中央部東寄りに位置する。2・3区は全調査区の中で最も遺構密度が高く、掘立柱建物・井戸・土坑等が狭い範囲に集中的に展開する。一方、4区は、南北に併行して展開する溝状遺構が大半を占める。これらの溝状遺構は、第Ⅰ・Ⅱ区域と同様に耕地に伴う掘削痕(耕作痕)と考えられる。第Ⅲ区域でも近代以降の開発行為に伴う削平により、遺物包含層は失われており、遺物は遺構からの出土にとどまる。遺構検出面は地山である黄褐色土層の上面であるが、削平の影響を考慮すると本来の遺構構築面はもう少し高かったものと推定される。

検出された主な遺構は、掘立柱建物・井戸・土坑等である。特に、掘立柱建物は建物の桁行方向を南北に揃えた建物が複数存在するうえに、複数棟がまとまり持って展開している。また、井戸も建物の近傍において多数検出している。遺構の配置状況から類推すると、12~15列にかけて掘立柱建物や井戸が集中することから、この範囲が集落(居住域)の中心城であったと考えられる⁽⁵⁾。

なお、掘立柱建物については、柱穴から出土する遺物が僅少であったため、その帰属時期を明確にとらえることができなかったが、柱穴の規模や建物の桁行方向が異なるため、その違いが時期差を示している可能性が指摘できる。

2 遺構の概要(第21~28図、第3・5・6表)

1) 掘立柱建物(第21~23図)

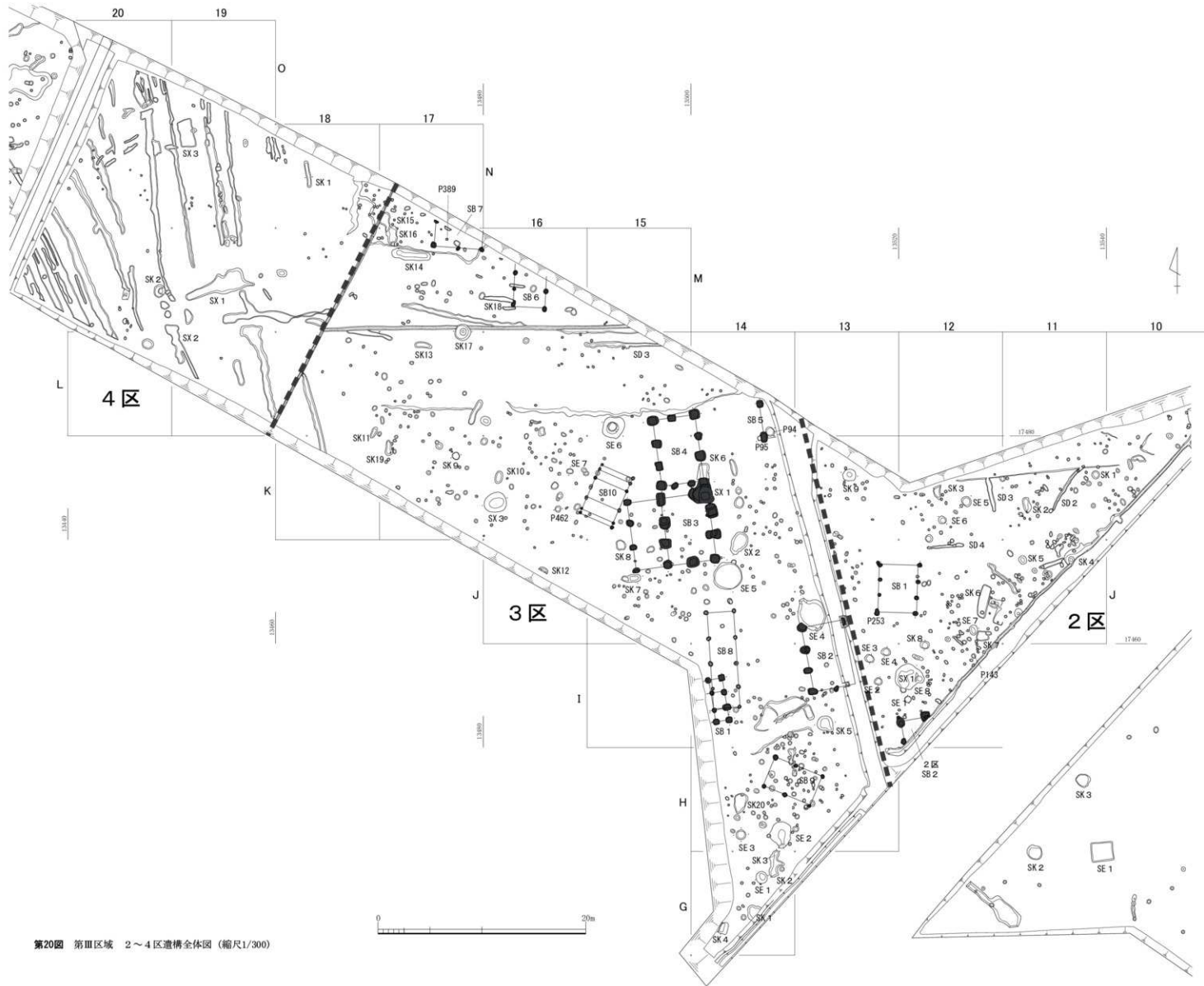
第Ⅲ区域では、11棟の掘立柱建物を検出した。建物の配置状況から、おおそそ二つのグループに分けられる。第Ⅲ区域中央に位置する2区SB1・2および3区SB1・5・8~10のまとまり(ⅢA群)と、第Ⅲ区域北西端に位置する3区SB6・7のまとまり(ⅢB群)である。

ⅢA群は、小型の側柱建物2棟(3区SB9・10)、中型の側柱建物4棟(2区SB1、3区SB2・4・8)、規模不明の総柱建物1棟(3区SB1)、規模不明の建物2棟(2区SB2、3区SB5)から構成される。

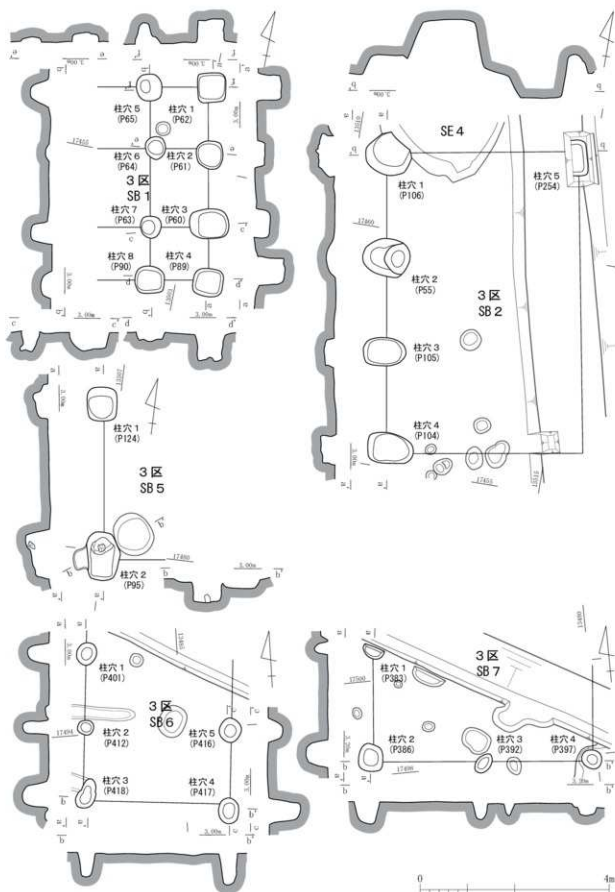
3区SB1(第21図)は、3区の南側I14に位置する。調査区の西壁沿いに検出しており、建物の西半部は調査区外に展開する。検出した規模は南北3間×東西1間以上の総柱建物である。南北方向を桁行と仮定すると、桁行長約4.11m、梁行長1.28m以上をはかる。柱穴の平面形は外周部の主柱穴が方形を基調とするが、建物内部の束柱(推定)にあたる柱穴6・7は不整な円形を呈する。

3区SB2(第21図)は、2・3区の境のI13・J13に位置する。東側の柱穴列は現用の排水路下に位置するため、北東隅の柱穴5のみを検出した。桁行3間×1間をはかる側柱建物であり、桁行長約6.38m、梁行長約4.06mをはかる。柱穴の平面形は、不整な方形および楕円形・円形を呈する。

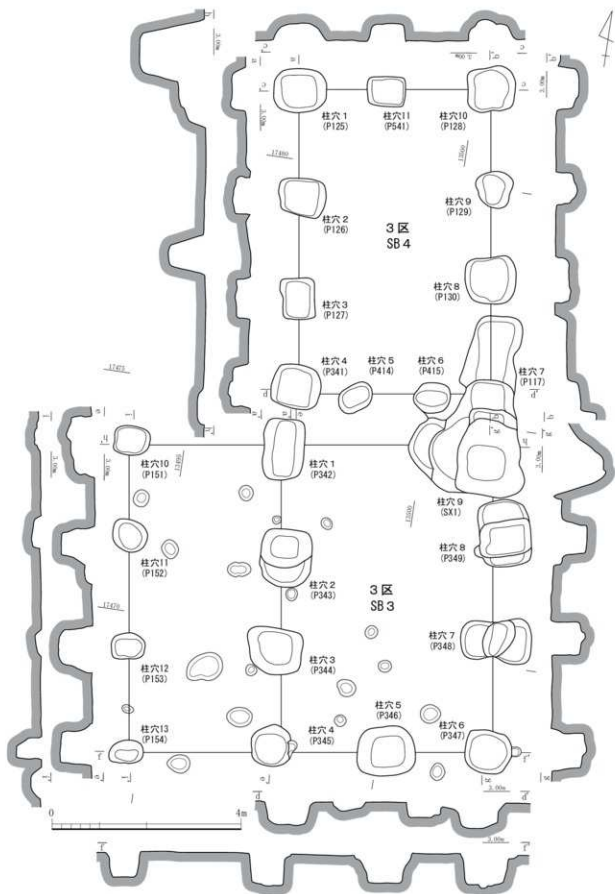
3区SB3(第22図)は、3区の東側J14・J15・K14・K15に位置する。桁行3間×梁行2間の側柱



第20図 第三区域 2～4区遺構全体図 (縮尺1/300)



第21圖 第Ⅲ区域 3区SB1・2・5～7 (縮尺1/80)



第22圖 第Ⅲ区域 3区SB3・4 (縮尺1/80)

建物であり、西側に庇もしくは下屋等の附属施設を設ける。主屋の梁行は北側では1間だが、南側では2間となる。主屋は桁行長約6.50m、梁行長約4.51mをはかる。主屋の柱穴の平面形は、不整な長方形および方形を呈する。西側の附属施設の柱穴は主屋の柱穴よりも規模が小さく、平面形は不整な方形を呈する。一部の柱穴からは、須恵器が出土している。

3区SB4（第22図）は、3区の東側K14・K15・L14・L15に位置する。桁行3間×梁行3間の側柱建物であり、梁行は北側では2間だが、南側では3間となる。桁行長約6.47m、梁行長約4.06mをはかる。柱穴の平面形は、不整な長方形および方形を呈する。南東隅の柱穴7は、3区SB3の柱穴10と重複しているが、先後関係はとらえられなかった。

3区SB5（第21図）は、3区の北東隅K14・L14に位置する。建物の南西隅を検出したにとどまり、主要部分は現用の排水路下および東側の調査区外に展開する。検出したのは西側の柱穴列を構成する柱穴2基のみであり、南北方向を桁行と仮定すると桁行長は3.92m以上をはかる。柱穴の平面形は不整な長方形および方形を呈し、柱穴2には柱根が遺存していた。

3区SB8（第23図）は、3区の東側I14・J14に位置する。南西側は3区SB1と重なり、南西側の柱穴5は3区SB1の柱穴7と重複する。桁行4間×梁行1間の側柱建物であり、南側の梁行が北側に比べて狭くなっている。桁行長約9.30m、梁行長は北側で約2.64m、南側で約2.49mをはかる。柱穴の平面形は、不整な楕円形および円形を呈する。一部の柱穴内からは、中世のカワラケが出土している。

3区SB9（第23図）は、3区の南側H13・H14に位置する。桁行2間×梁行1間の側柱建物であり、桁行長約4.88m、梁行長約3.06mをはかる。柱穴の平面形は、不整な楕円形および円形を呈する。

3区SB10（第23図）は、3区の中央部K15・K16、3区SB3の北西側に位置する。柱穴の並びが変則的であることから、同一箇所において同規模の建物の建て替えが行われた可能性がある。建物の規模は桁行1間×梁行1間の側柱建物であるが、南側もしくは北側に庇もしくは下屋等の附属施設を有する。柱穴の配置状況から復元すると、柱穴1・3・4・6および柱穴7・8で構成される南側の建物（網掛けの柱穴で構成される建物）と、柱穴2・5・9・10および柱穴11・12で構成される北側の建物（白抜きの柱穴で構成される建物）とに区分できる。前者は南側に庇もしくは下屋等の附属施設を、後者は北側に同じく付属施設を有する。主屋の規模は、北側が桁行長約3.32m、梁行長約2.92m、南側が桁行長約3.32m、梁行長約3.30mをはかる。柱穴の平面形は、いずれも不整な楕円形および円形を呈する。

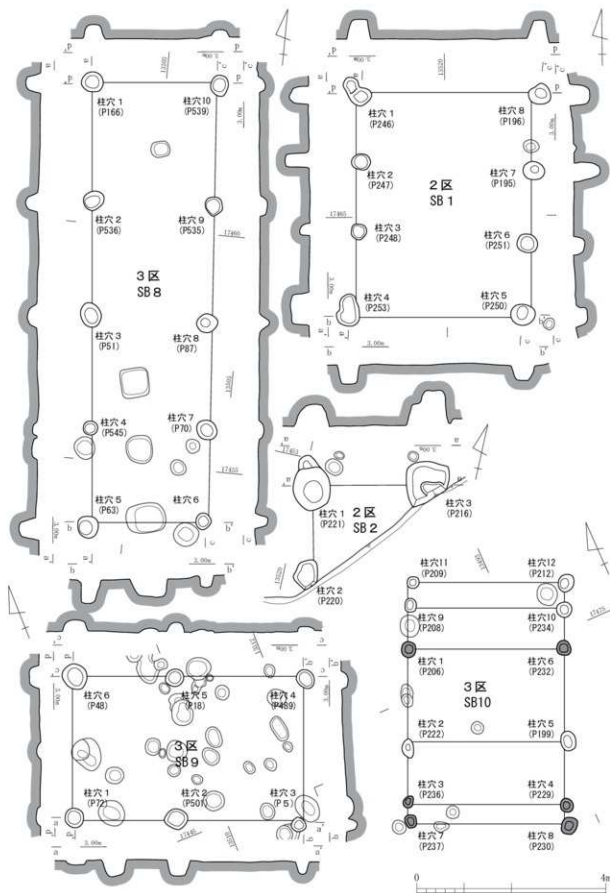
2区SB1（第23図）は、2区の西側J12・J13に位置する。桁行3間×梁行1間の側柱建物であり、桁行長4.75m、梁行長3.72mをはかる。柱穴の平面形は、不整な楕円形および円形を呈する。一部の柱穴内からは、玉作り関連遺物（未成品）が出土している。

2区SB2（第23図）は、2区の南側I12・I13に位置する。建物の北西隅を検出したのみであり、建物の主要部分は南東側の調査区外に展開する。南北1間以上×東西1間以上をはかる。南北方向を桁行と仮定すると、桁行長1.89m以上、梁行長2.52m以上をはかる。柱穴の平面形は、不整な方形および楕円形を呈する。一部の柱穴からは、須恵器が出土している。

ⅢB群は、規模不明の建物2棟（3区SB6・7）から構成される。

3区SB6（第21図）は、3区の北西側M16に位置する。建物の南半部を検出したのみで、北半部は調査区外に展開する。桁行2間以上×梁行1間をはかる側柱建物と推定され、桁行長3.12m以上、梁行長約3.09mをはかる。柱穴の平面形は、不整な楕円形および円形を呈する。

3区SB7（第21図）は、3区の北西側M16・M17・N17に位置する。建物の南半部を検出したのみで、



第23圖 第Ⅲ区域 3区SB 8~10、2区SB 1・2 (縮尺1/80)

北半部は調査区外に展開する。南北1間以上×東西2間をはかる。南北方向を桁行と仮定すると、桁行長2.38m以上、梁行長約4.64mをはかる。柱穴の平面形は、不整な楕円形もしくは円形を呈する。

2) 土坑・廃棄土坑 (第24・28図)

3区SK 2・3 (第24図) は、3区の南側G14に位置する。平面形は不整形なト字状を呈しており、2基もしくはそれ以上の土坑が重複していると考えられる。しかしながら、土層断面から各遺構の区別および先後関係は捉えきれなかった。掘方の断面形は浅皿状をなす。

3区SK 4 (第24図) は、3区の南端G14の調査区の西壁際位置する。東半部のみを検出であり、西半部は調査区外に展開する。平面形は不整な方形を呈すると考えられ、掘方の横断形は浅皿状をなす。遺構内からは、弥生土器が出土している。

3区SK 5 (第24図) は、3区の東側I13に位置する。平面形は不整な方形を呈し、掘方の横断形は浅皿状をなす。遺構内からは、弥生土器および玉作り関連遺物(玉鏝)が出土している。

3区SK 7 (第24図) は、3区の中央部J15、3区SB3の南側に位置する。平面形は不整な長楕円形を呈する。掘方の断面形は浅皿状をなすものの、西側が浅く、東側が一段深く掘り込まれている。

3区SK 9 (第24図) は、3区の西側K17に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は裾がややすぼまる逆台形状をなす。堆積土層の4層が焼土層であることから、遺構内で火を焚いていたと考えられる。遺構内からは、中世のカワラケや玉作り関連遺物(石材等)が出土している。

3区SK17 (第24図) は、3区の北西側L17・M17に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。遺構内からは、弥生土器が出土している。

2区SK 8 (第24図) は、2区の南西側I12・J12に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。

2区SK 9 (第24図) は、2区の北西側K13に位置する。平面形は不整な円形を呈する。掘方の断面形は下位で屈曲してすぼまる逆台形状をなす。

3区SX 2 (第28図) は、3区の東側J14・K14、3区SB3の東側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。

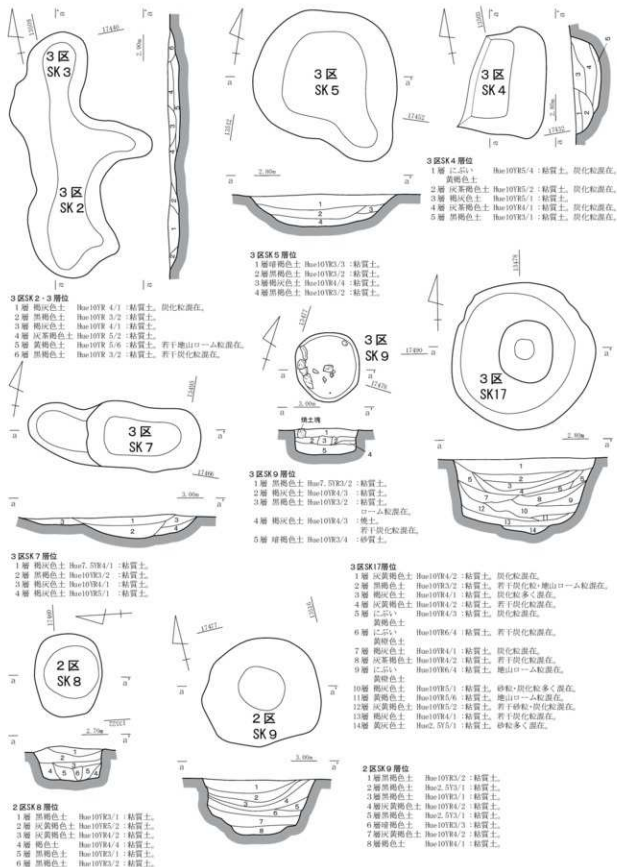
3区SX 3 (第28図) は、3区の中央部西寄りK16に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は中位から裾に向かって壁がわずかに広がる袋状をなす。

2区SX 1 (第28図) は、2区の南側I12・13に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は北側では中位で壁がわずかに外側に膨らみ、南側では裾がわずかに広がる形状をなす。堆積土層は人為的に埋め戻された影響で、複雑な様相を呈する。

3) 井戸 (第25～27図)

3区SE 1 (第25図) は、3区の南東側G14に位置する。平面形は不整な円形を呈する。掘方の断面形は、西側は裾がすぼまるものの、東側では中位から下位にかけて壁が外側に広がる袋状をなす。底部には、径約0.50m、高さ約0.44mをはかる曲物枠を据えおり、曲物枠内外からは長さが約0.42～0.51mをはかる板材が出土する。堆積土層の5層が、井戸枠の裏込めの土層と考えられる。遺構内からは、中世のカワラケが出土している。

3区SE 2 (第25図) は、3区の南東側H14、3区SK 2・3の北側、3区SB9の南側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は底部に向かって緩やかに収束するボウル状をなす。なお、後世の地震の影響で掘方壁面に亀裂が入り、そこに遺構の堆積土層が貫入したため、掘方壁面の立ち上が



第24圖 第三区域 3区SK 2～5・7・9・17、2区SK 8・9 (縮尺1/40)

りはやや不鮮明である。このため、本来は一回り小さい掘方の遺構であった可能性がある。

3区SE3(第25図)は、3区の南東側H14、3区SE2の西側に位置する。平面形は不整な円形を呈する。掘方の断面形は壁の下半部が裾に向かって外側へ広がる袋状を呈する。底部には、径約0.45m、高さ約0.41mをはかる曲物杵を据えている。堆積土層の6層が、井戸杵の裏込めの土層であると考えられる。遺構内からは、中世のカワラケ・漆器碗等が出土している。

3区SE4(第25図)は、3区の東側J13に位置する。平面形は、不整な楕円形を呈する。掘方の断面形は北側では掘方壁面の崩落によって起伏を有し、南側では裾が広がる袋状をなす。堆積土層は人為的に埋め戻されたと推定され、壁面の崩落も伴い複雑な土層堆積の様相を示している。井戸として扱ったが、廃棄土坑の可能性も否定できない。遺構内からは、中世のカワラケ等が出土している。

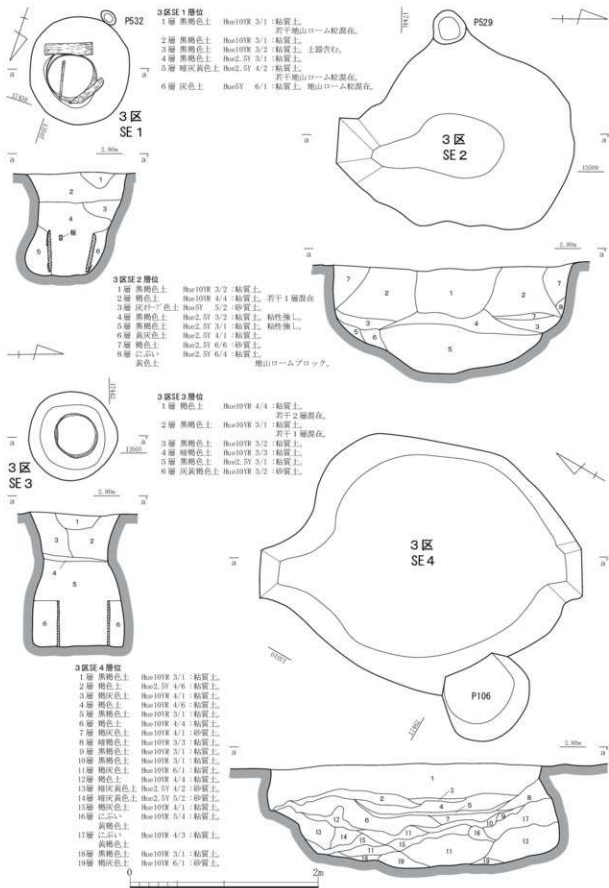
3区SE5(第26図)は、3区の西側J14、3区SB3の南側に位置する。平面形は不整円形を呈し、掘方の断面形はわずかに裾がすぼまる逆台形状をなす。底面は平坦であり、中央には支柱を用いた縦板組横棧留めの井戸杵を設ける。しかしながら、後世の地震の影響で掘方壁面に亀裂が入り、そこに遺構の堆積土層が貫入したため、掘方壁面の立ち上がりはやや不鮮明である。

井戸杵は平面形が菱形に変形しており、このため正確ではないが外法で一辺が約0.78mをはかるものと推定される。構造としては、まず底面に長さ約0.72~0.75mの角材を方形に組んで最下段の横棧を設け、その四隅に高さ約0.44mの角材を支柱として立てる。支柱上には改めて角材を方形に組んで、二段目の横棧を設け、その外側に幅約0.22~0.31mの板材を縦板として巡らせる。横棧および支柱・縦板のいずれも「ほぞ穴」等の組み上げる仕口を有していないことから、井戸杵を組み上げながら裏込めの土で井戸杵を固定していったものと考えられる。なお、下から三段目、遺存している最上位の横棧は、一・二段目の横棧に比して薄い板材を用いており、縦板の隙間に差し込んで横架している。このため、二段目と三段目の横棧の間には支柱は設けていない。井戸杵の四隅には、接合部の隙間を塞ぐ目的で板材を一枚立てて打ち込んでいる。遺構内からは、中世のカワラケ・越前焼・漆器碗等が出土している。

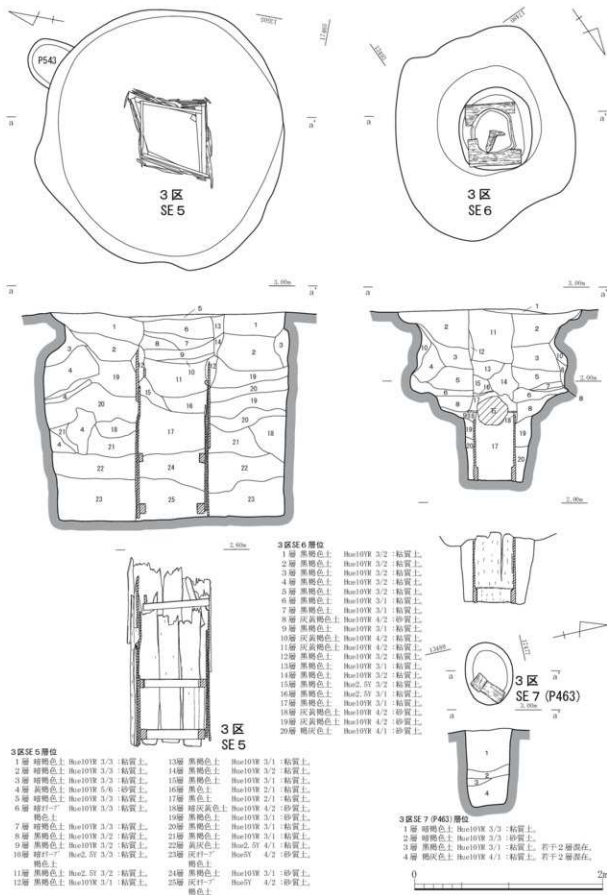
3区SE6(第26図)は、3区の中央部北寄りK15・L15、3区SB4の西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。掘方の断面形は上半部の壁が外側に広がる袋状をなし、下半部は裾がすぼまる逆台形状を呈する。下半部には、木製の刳り貫き桶が井戸杵として据えられている。この井戸杵の上部には長さ約0.54m、幅約0.21mと長さ約0.55m、幅約0.30mをはかる2枚の板材が桶の上縁にかかるように置かれ、その中に幅約0.33mをはかる礫を一石据えている。板材は上に置かれた石の重量と板材自身の腐朽より井戸杵上縁に沿う形で半円状に破損し、その破片が井戸杵内に落ち込んでいた。2枚の板材と礫は井戸を塞ぐためのもと考えられ、井戸廃絶時の儀礼的な行為の痕跡と考えられる。

なお、下半部に井戸杵として据えられた刳り貫き桶は、径約0.50m、高さは遺存値で約0.75mをはかる。刳り貫き桶は脆弱な状態であり、周囲の土層が取り除かれると自重によって崩壊したため取り上げることが叶わなかった。堆積土層の11~18層が井戸杵上部の井戸内堆積土である。掘方の上半部が広く掘削されているのは、下半部に刳り貫き桶を設置するための足場の確保から広く掘削されたものと思われる。このため、井戸杵は刳り貫き桶の1基のみ設置するのではなく、その上にも桶を組み上げたか、別の部材を用いて井戸杵を設けていたと推定される。底部から井戸杵を設置しながら、井戸杵を固定するために2~10・19・20層を裏込めの土として埋められたものと考えられる。

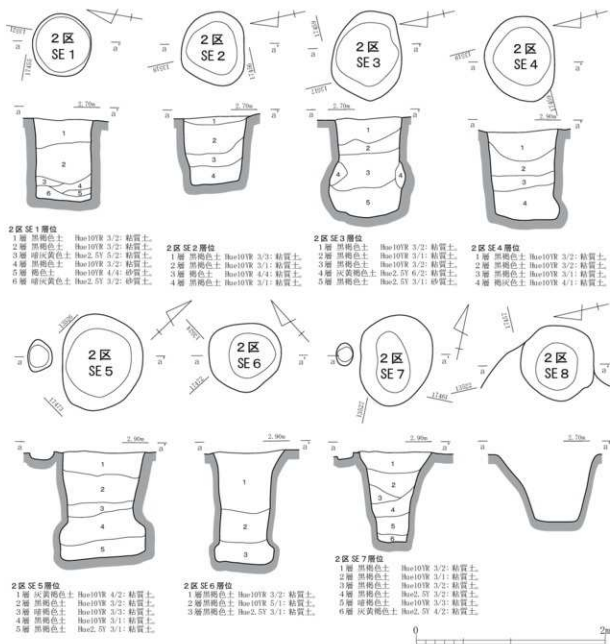
3区SE7(第26図)は、3区の中央西寄りK16、3区SB10の西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。堆積土層の1層中より板材が2枚出土している。



第25図 第Ⅲ区域 3区SE1～4 (縮尺1/40)



第26図 第三区域 3区SE 5~7 (縮尺1/40)



第27図 第三区域 2区SE 1～8 (縮尺1/40)

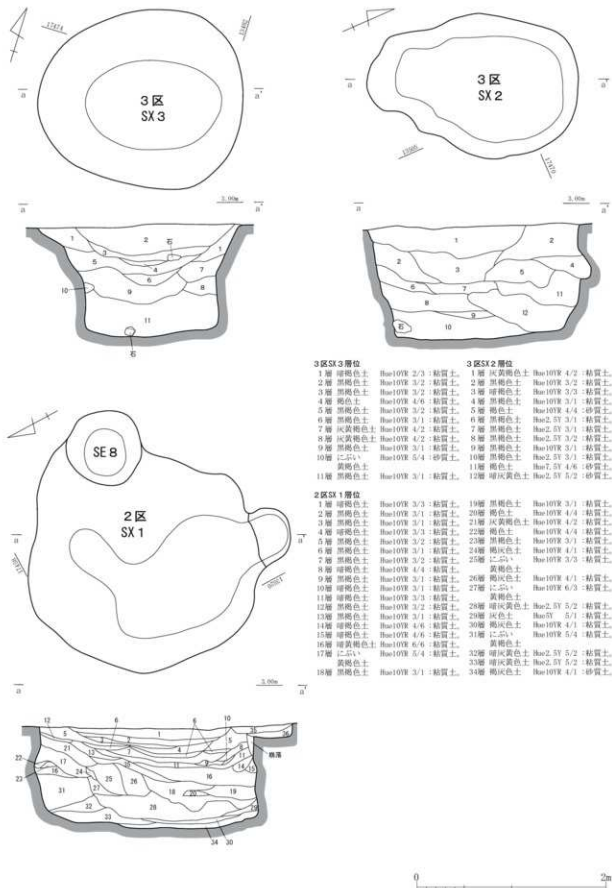
板材の大きさは、長さ約0.15m、幅約0.13mと、長さ約0.24m、幅約0.14mを各々はかる。

2区SE 1 (第27図) は、2区の南側 I 12、2区SX 1の南側に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は壁がほぼ直立する箱状をなす。

2区SE 2 (第27図) は、2区の南側 I 13、2区SX 1の西側に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は裾がわずかにすぼまる逆台形状をなす。

2区SE 3 (第27図) は、2区の南側 I 13、2区SE 4の西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は下半部が膨らむ袋状を呈する。遺構内からは、中世のカワラケが出土している。

2区SE 4 (第27図) は、2区の南側 I 13、2区SX 1の北西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は北側は裾がわずかにすぼまる形状だが、南側は下位で壁が外側に膨らむ袋状をなす。遺構内からは、中世の土師質羽釜が出土している。



第28図 第Ⅲ区域 3区SX2・3、2区SX1 (縮尺1/40)

2区SE5（第27図）は、2区の中央部北寄りK12に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は下位で壁が外側に膨らむ袋状をなす。遺構内からは、中世のカワラケ等が出土している。

2区SE6（第27図）は、2区の中央部北寄りK12に、2区SE5の南西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は下位で壁が外側に膨らむ袋状をなす。

2区SE7（第27図）は、2区の中央部南寄りJ12、2区SB1の南東側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、掘方の断面形は裾がすばまる逆形状をなす。遺構内からは、須恵器が出土している。

2区SE8（第27図）は、2区の南側I12に位置し、2区SX1の東側に接する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は裾がすばまる逆台形状をなす。

4）溝（第8図）

2区SD1（第8図）は、2区の東端L10に位置する。後述する第IV区域の1区SD1につながる溝であり、調査区内では延長約2.06mを検出したにとどまっている。詳細については次節にて1区SD1とあわせて述べる。なお、遺構内からは弥生土器が出土している。

第3表 第III区域遺構観察表

【掘立建物】		前行方線方向・前行方線すばまりの概況			
位置	詳細	平面	時期	遺物	特徴
遺構	等尺図区	(m)	構造		
3区 111	第2196	掘 行 長：4.11m	—	—	3区の東端、調査区の東端直下に位置する。建物の北端が調査区外に露出していることから建物の形態は不明である。掘立北端は南寄りとなる。その方位はN10°Wをほかから、柱穴の平面形は不整な正方形および円形を呈し、溝壁土層は黒褐色土・黄褐色土層である。建物の内部に構築する柱穴（柱穴No.71）は、南側の柱穴比と距離が約3.5m。また、一部の柱穴は、土層の断面から柱を築いた痕跡が確認でき、その幅から柱は平均幅であるが約幅19cmに推定される。
		掘 行 長：1.29m以上 溝 幅：2.50m以上 柱穴長軸長：0.49~0.84m 柱穴短軸長：0.43~0.64m 柱穴深さ：0.13~0.74m 掘行程度寸法：1.27m 掘行程度寸法：1.29m			
3区 112・J12	第2196	掘 行 長：4.06m	—	—	3区の東端、調査区の東端直下に位置する。東側柱穴は、2区との境にあたる伊勢川下に位置するため、東側の柱穴は一帯露出するに上った。前行方線はN10°Wをほかから、柱穴の平面形は不整な正方形および楕円形・円形であり、溝壁土層は黒褐色土・黄褐色土層である。北東側の柱穴1は、3区SD4に知られている。溝壁柱穴の中間には、土質層定まりが存在する。壁材を土と築成している可能性がある。また、柱穴2は、土層の断面から柱を築いた痕跡が確認でき、その幅から柱は約幅19cmに推定される。
		掘 行 長：2.59m 溝 幅：2.50m 柱穴長軸長：0.50~1.00m 柱穴短軸長：0.40~0.91m 柱穴深さ：0.23~0.39m 掘行程度寸法：2.3m 掘行程度寸法：4.06m			
3区 J14・J15 K14・K15	第2196	掘 行 長：全長0.50m	古代	—	3区の東端、2区SD4の南側に直結して位置する。前行方線はN8°Wをほかから、柱穴の平面形は不整な正方形および円形を呈し、溝壁土層は黒褐色土・黄褐色土層である。さらに、掘立の西側は柱穴に際して一帯の小さな規模の柱穴（柱穴No.14）が露出するが、西側に並ぶものは、2区等の南端部が露出し残っていたと推定される。掘立幅は、南北長（19m、20m）、東西長（約10m、18m）である。溝壁は約幅0.47mにわたる。掘立幅の柱穴は、長軸長約71~8.79m、短軸長約59~8.48m、深さ約19~0.60mにわたる。南北両側の掘立幅の中心は、土層の掘立幅中心と一致している。また、掘立幅と土層の掘立幅との間に、土層の断面から柱を築いた痕跡が確認でき、その幅から柱は平均幅であるが約幅25cmに推定される。
		掘 行 長：全長0.47~1.60m 柱穴長軸長：全長0.48~1.45m 柱穴短軸長：全長0.48~1.36m 柱穴深さ：全長0.17m 掘行程度寸法：全長0.17m 掘行程度寸法：全長0.13m 掘立幅：2.70m			
3区 東1・K15 L14・L15	第2196	掘 行 長：4.47m	—	—	3区の東端、2区SD3の北側に直結して位置する。前行方線はN8°Wをほかから、柱穴の平面形は不整な正方形および円形を呈し、溝壁土層は黒褐色土・黄褐色土層である。掘立の南東柱穴は掘立中心に接する。柱穴1は、調査区中の平均的な掘立穴であり、約幅30cmである。また、一部の柱穴は、土層の断面から柱を築いた痕跡が確認でき、その幅から柱は平均幅であるが約幅19cmに推定される。
		掘 行 長：4.06m 溝 幅：2.27~2.12m 柱穴長軸長：0.27~1.12m 柱穴短軸長：0.20~0.90m 柱穴深さ：0.20~0.32m 掘行程度寸法：2.16m 掘行程度寸法：2.27~0.3m 掘立幅：2.2m			
3区 K10・L10	第2196	掘 行 長：3.92m以上	—	—	3区の東端北東端、調査区の東端直下に位置する。建物の南西側のみの構造であり、大部分は伊勢川下および調査区外にあたる。このため、建物の形態は不明である。掘立構造は柱穴に際しては不明である。このため、柱穴の方位は不明である。柱穴の平面形は不整な正方形および円形を呈し、溝壁土層は黒褐色土・黄褐色土層である。また、柱穴には掘立が露出していた。柱壁は、溝壁で約幅16cm、掘立の幅は約幅16cm。
		掘 行 長：— 溝 幅：— 柱穴長軸長：0.72~1.13m 柱穴短軸長：0.43~0.49m 柱穴深さ：0.21~0.32m 掘行程度寸法：— 掘行程度寸法：—			

第3節 第Ⅲ区域の遺構

位置	経緯	坐標	時期	遺物	特徴
遺構	写真図	(m)	構造		
3区	第10区	掘り出し	2.12m以上	—	
		掘り出し	3.09m		
M6	—	面積	6.64㎡以上	—	
		掘り出し	6.21×0.45m		
M6	区域別(1)	掘り出し	6.22×0.47m	—	—
		掘り出し	6.22×0.45m		
3区	第10区	掘り出し	1.96m	—	—
		掘り出し	3.09m		
M6・M7・N7	—	掘り出し	2.38m以上	—	—
		掘り出し	4.64m		
M6	区域別(1)	面積	11.04㎡以上	—	—
		掘り出し	6.20×0.20m		
M7	区域別(1)	掘り出し	6.20×0.20m	—	—
		掘り出し	6.20×0.40m		
M7	区域別(1)	掘り出し	2.28m	—	—
		掘り出し	2.28m		
3区	第10区	掘り出し	2.28m	—	—
		掘り出し	3.39m		
110・111	第10区	掘り出し	2.26m	—	—
		掘り出し	2.47m		
M8	区域別(1)	面積	22.96㎡	—	—
		掘り出し	6.20×0.44m		
M8	区域別(1)	掘り出し	6.09×0.52m	—	—
		掘り出し	2.23m		
3区	第10区	掘り出し	2.64m	—	—
		掘り出し	2.96m		
113・114	—	掘り出し	4.68m	—	—
		掘り出し	2.96m		
M9	—	面積	11.91㎡	—	—
		掘り出し	6.20×0.27m		
M9	—	掘り出し	6.20×0.20m	—	—
		掘り出し	6.09×0.25m		
M9	—	掘り出し	2.44m	—	—
		掘り出し	3.66m		
3区	第10区	掘り出し	2.62m	—	—
		掘り出し	3.20m		
K15・K16	—	面積	29.69㎡	—	—
		掘り出し	2.62×0.42m		
M10	(北)	掘り出し	2.62×0.22m	—	—
		掘り出し	2.62×0.22m		
M10	(北)	掘り出し	2.62×0.22m	—	—
		掘り出し	2.62×0.22m		
3区	第10区	掘り出し	2.62×0.22m	—	—
		掘り出し	3.20m		
K15・K16	—	面積	29.69㎡	—	—
		掘り出し	2.62×0.22m		
M10	(南)	掘り出し	2.62×0.22m	—	—
		掘り出し	2.62×0.22m		
M10	(南)	掘り出し	2.62×0.22m	—	—
		掘り出し	2.62×0.22m		
2区	第10区	掘り出し	4.73m	—	—
		掘り出し	3.72m		
112・113	—	面積	17.67㎡	—	—
		掘り出し	6.22×0.40m		
M1	区域別(1)	掘り出し	6.22×0.40m	—	—
		掘り出し	6.22×0.60m		
M1	—	掘り出し	1.96m	—	—
		掘り出し	3.72m		
2区	第10区	掘り出し	1.69m以上	—	—
		掘り出し	2.55m以上		
110・111	—	面積	4.76㎡以上	—	—
		掘り出し	6.45×0.93m		
M2	—	掘り出し	6.20×0.90m	—	—
		掘り出し	6.22×0.71m		
M2	—	掘り出し	1.69m	—	—
		掘り出し	2.52m		

第3章 遺構

【土坑】

位置	標記	規模		時期	遺物	特徴
		長さ	幅			
3区	第100	長	幅	深	—	—
G14	第100	長 幅 深	1.31m 1.53m 0.16m	—	—	3区の南側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道はわずかに屈折を有し、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土および黄褐色土である。当面は遺構も、もしくはそれ以上の遺構が露出してはなかったが、東方は深く掘削が行われ遺構は観察できなかった。
第2・3	—	部 状	不整形	—	—	—
3区	第100	長 幅 深	1.18m 0.80m以上 0.20m	弥生時代	—	3区の南側、調査区の西側に位置する。両断面は調査区内外をわたるため、遺構の状況は不明である。特に北端から南端にかけては、直道部分はN40° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
G4	—	部 状	不整形	—	—	—
3区	第100	長 幅 深	1.73m 1.52m 0.24m	弥生時代	—	3区の北側、2区S2の南側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
E5	—	部 状	不整形	—	—	—
3区	第100	長 幅 深	1.82m 1.52m 0.22m	弥生時代	—	3区の中央部、3区S3の南側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
J15	—	部 状	不整形	—	—	—
E7	—	部 状	不整形	—	—	—
3区	第100	長 幅 深	0.74m 0.67m 0.20m	中世	—	3区の南側に位置する。主軸は、N10° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
K17	—	部 状	不整形	—	—	—
第9	区別第11 (I)	部 状	不整形	—	—	—
3区	第100	長 幅 深	1.50m 1.69m 0.79m	弥生時代	—	3区の北側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
E17	—	部 状	不整形	—	—	—
E17-M07	第100	長 幅 深	1.50m 1.69m 0.79m	弥生時代	—	3区の北側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
E17	—	部 状	不整形	—	—	—
2区	第100	長 幅 深	0.87m 0.75m 0.24m	—	—	2区の南側に位置する。主軸は、S40° Eをむく。直道はほぼ直線であり、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
E12・J12	第100	長 幅 深	1.29m 1.25m 0.60m	—	—	2区の北側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道はほぼ直線であり、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
K13	—	部 状	不整形	—	—	—
E9	—	部 状	不整形	—	—	—
4区	第200	長 幅 深	2.46m 0.45m 0.18m	弥生時代	—	4区の北側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は緩やかにばらばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
N18	—	部 状	不整形	—	—	—
E1	—	部 状	不整形	—	—	—

【井戸】

位置	標記	規模		時期	遺物	特徴
		長さ	幅			
3区	第100	長 幅 深	1.11m 1.66m 1.09m	中世	—	3区の南側に位置する。主軸は、N21° Wをむく。直道はほぼ直線である。東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
G14	—	部 状	不整形	—	—	—
E1	区別第11 (II・9)	長 幅 深	2.32m 2.11m 1.16m	—	—	3区の南側、3区S9の南側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
3区	第100	長 幅 深	2.32m 2.11m 1.16m	—	—	3区の南側、3区S9の南側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
H11	—	部 状	不整形	—	—	—
第2	区別第11 (I)	長 幅 深	0.66~0.80m 0.96m 0.96m	弥生時代	—	3区の南側、3区S2の南側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
3区	第100	長 幅 深	0.96m 0.96m 1.25m	弥生時代	—	3区の南側、3区S2の南側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
H11	—	部 状	不整形	—	—	—
E3	区別第11 (I)	長 幅 深	0.90~0.94m 1.18m 0.87m	弥生時代	—	3区の南側、3区S2の南側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
3区	第100	長 幅 深	1.18m 0.87m 1.09m	中世	—	3区の南側に位置する。主軸は、N40° Eをむく。直道はほぼ直線であり、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
J13	—	部 状	不整形	—	—	—
E4	—	部 状	不整形	—	—	—
3区	第100	長 幅 深	2.80m 2.68m 1.27m	中世	—	3区の北側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は中央部にかけて緩やかにばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。
J14	—	部 状	不整形	—	—	—
第5	区別第12 (II・1)	長 幅 深	2.15~2.52m 0.45m 0.18m	弥生時代	—	4区の北側に位置する。主軸は、N30° Eをむく。直道は緩やかにばらばら、東方の断面はほぼ直線となる。溝壁土層は、褐色土層・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土・黄褐色土である。

第4節 第IV区域の遺構 [図版第13～18]

1 第IV区域の概要(第8・29図)

第IV区域は、D3～G12までの1・8区にあたり、全調査区の西端に位置する。一般県道佐野山岸線を挟んで第III区域2・3区の南東側に位置し、第III区域以西に比して一段低い地形をなす。過去の圃場整備等の影響で、遺構面が大きく削平を受けており、このため検出した遺構は僅少である。加えて遺物包含層も失われており、遺物は遺構からの出土にとどまる。遺構検出面は、山地である黄褐色土層の上面であるが、削平の影響を考慮すると本来の遺構構築面はもう少し高かったものと推定される。検出した主な遺構は、井戸・溝・土坑および自然流路(川)等である。

特徴的な遺構としては、1区の中央部から東側で検出した南北方向に展開する溝があり、県道を挟んで第III区域2区の東端につながるものである⁽⁶⁾。弥生時代後期に属する溝であり、集落域を画する溝と考えられる。さらに8区においては、大きく蛇行する自然流路を検出している。

2 遺構の概要(第30～32図、第4表)

1) 土坑(第30図)

1区において、平面形が円形を基調とする土坑を3基検出する。1区SK1は8区川の近傍に、1区SK2・3は1区SE1の近傍に各々位置し、遺構の規模等から井戸であった可能性もある。

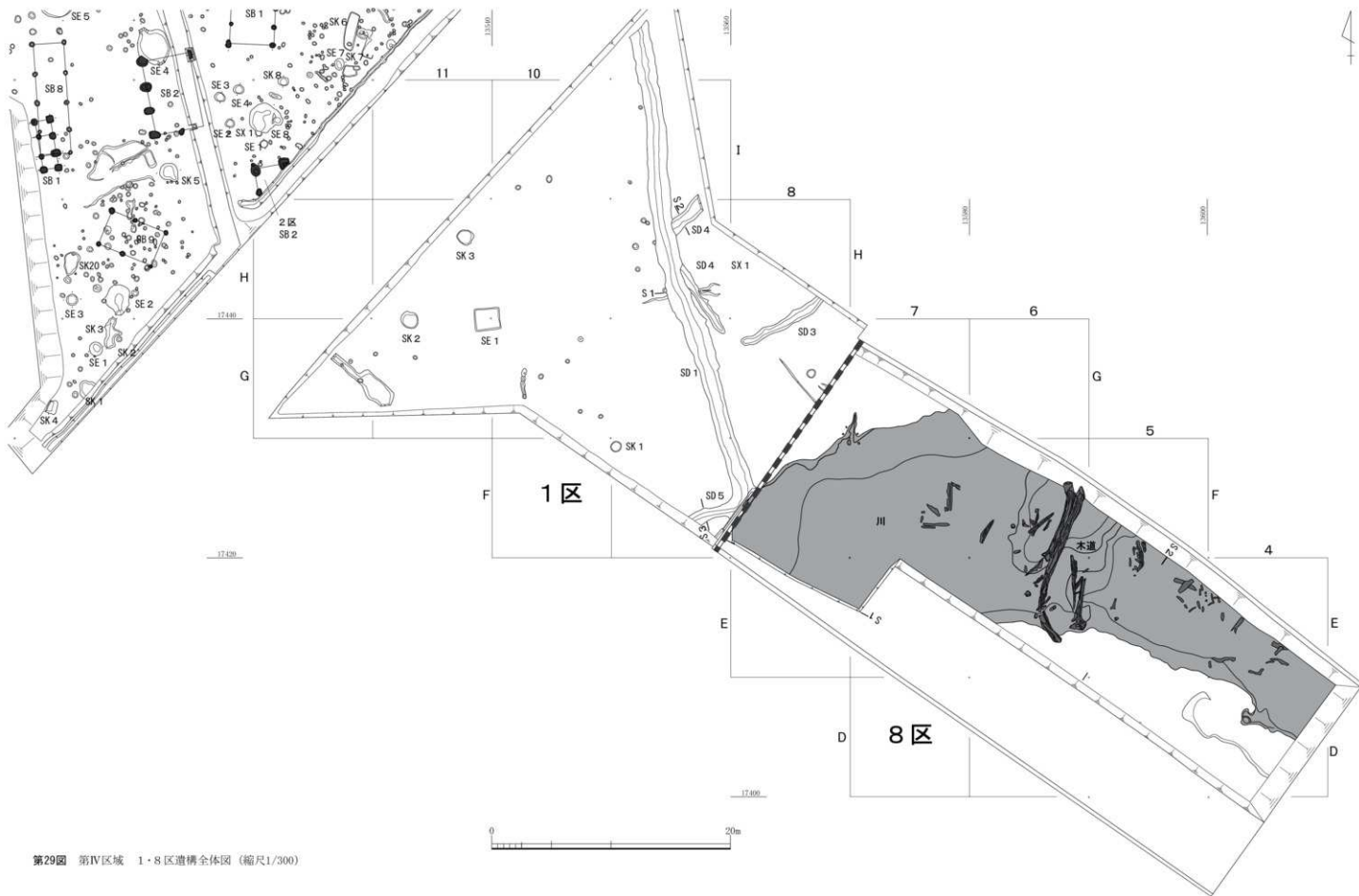
1区SK1(第30図)は、1区の中央部南寄りF9に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。

1区SK2(第30図)は、1区西側G11・H11、1区SE1の西側に位置する。平面形は不整な円形を呈する。掘方の断面形は裾がすぼまる逆台形状をなす。底面は、中央に向かって緩やかに沈む。

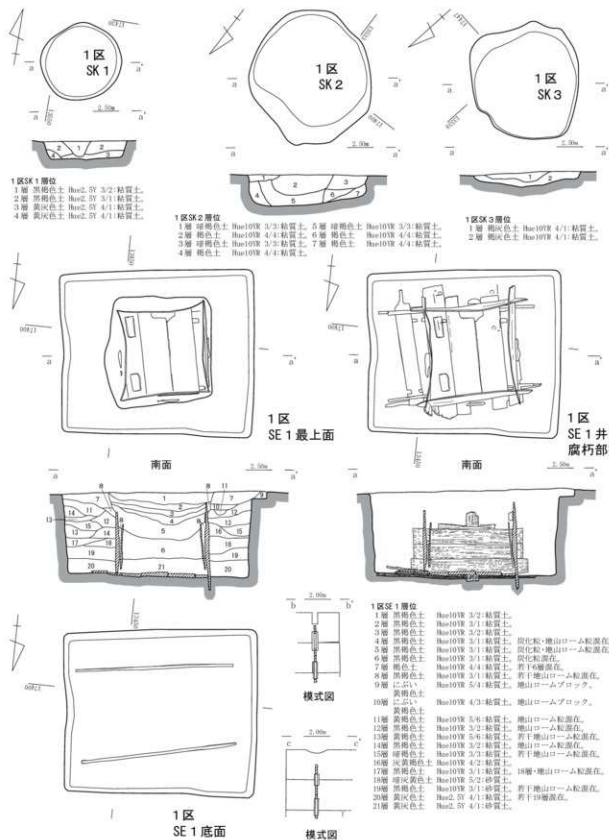
1区SK3(第30図)は、1区西側H11、1区SE1の北側に位置する。平面形は不整な円形を呈し、掘方の断面形は浅皿状をなす。

2) 井戸(第30図)

1区SE1(第30図)は、1区の西側G10・G11、H10・H11に位置する。掘方は東西方向に長軸を持つ長方形を呈し、掘方の断面形はわずかに裾がすぼまるものの、壁がほぼ直立する箱状をなす。内部には井戸枠として、方形横板組の井戸枠を有する。井戸の構造は、まず底面に長さ約1.65m(北側)と約1.67m(南側)の棒材を東西方向に併行して2本ならべる。この棒材の上に、交差する形で幅約0.15～0.29m、長さ約1.01～1.41mをはかる板材を6枚敷きならべる。この棒材と板材は、井戸枠の沈下を防ぐためのものと考えられる。板材には、「ほぞ穴」や両端に欠き込み等を有することから、建築部材の転用材を用いている。敷きならべた板材の上に、方形横板組の井戸枠を設置している。井戸枠は敷板の西から5枚目にかけて掘えられており、井戸枠の南西隅を除く三隅には、下位の棒材とほぼ同じ位置に長さ約0.495m(北東隅)、約0.44m(南東隅)、約0.22m(北西隅)をはかる棒材が東西方向に置かれている。井戸枠の隅にあたる板材の組み合わせ部分の下に位置することから、この棒材は井戸枠設置時に高さの調整のために置かれたものと推定される。板材は腐朽により最上段(南辺と西辺の下から四段目)の遺存状況は悪いものの、各辺ともに下から三段目まで遺存していた。井戸枠の各辺は土圧により板材が変形しており、正確ではないが、北辺が約1.24m(方形枠の内法約0.93m)、南辺が約1.20m(方形枠の内法約0.87m)、東辺が約1.19m(方形枠の内法約0.94m)、西辺が約1.22m(方形枠の内法約0.91m)をはかる。本来の形状は組まれた部材の一边が約1.2m、方形枠の内法が約0.9mをはかっていたものと考えられる。使用される板材は幅約0.16mをはかり、その両端に組み合わせ用の欠き込みを設け、蒸籠



第29図 第IV区域 1・8区遺構全体図 (縮尺1/300)



第30図 第IV区域 1区SK 1～3、SE 1 (縮尺1/40)

状に組み上げている。井戸枠の遺存高は、最上段の腐朽部も含めると底面の敷板から約0.66mをはかる。井戸枠の各辺の中央外側には、土圧による井戸枠の変形を抑えるために支持材として幅約0.135～0.265mの板材を縦方向に打ち込んでいる。遺構内からは、須恵器や土師器等が出土している。

3) 溝 (第29・31図)

1区SD1 (第29・31図) は、1区の中央部西寄り8・9列に位置し南南東から北北西にかけて展開する。G9・H9にて西側に若干張り出して蛇行するもののほぼまっすぐのびており、道路を挟んで第III地域2区の東端L10の2区SD1 (第8図) につながる。

1区では調査区内で検出した延長は約41.1mをはかり、2区での検出した延長は約2.06mにとどまるものの、道路を挟んだ両区間の総延長は道路下の未検出分も含めると約59.5mをはかる。1区内では底面の標高は約1.62～1.74mであり、高低差は約0.12mである。北端と南端で標高が下がるものの、大半はほぼ一定の高さを保っている。掘方の断面形は、船底状もしくは逆台形状をなす。一方、2区の底面の標高は約1.53mであり、1区よりも標高が下がる。掘方の断面形は、逆台形状をなす。排水を目的とした溝であるならば、1区の中央付近から南北に向かって下る傾斜をつけていたものと考えられる。

1区SD1の南端は8区川につながる。削平による影響のため明確ではないが、1区SD1の東側では遺構の検出が僅少であることから、西側の集落域を画するための区画溝と考えることができる。遺構内からは、多量の弥生土器および石器が出土している。

1区SD5 (第29・31図) は、1区の南端F8・9に位置する。1区SD1と直交するように設けられ、東側で8区川につながる。西側は調査区外に展開している。調査区内で検出された延長は約3.76mであり、上幅は約0.80～1.36m、深さは約0.49～0.56mをはかる。溝の横断形は、裾がすばまる逆台形状をなすが、中位から上位にかけては大きく開く。底面は平坦である。8区川との接点付近にて1区SD1と切り合っており、土層観察から1区SD5が古く、1区SD1が新しい。遺構内からは、弥生土器や玉作り関連遺物(石材等)が出土している。

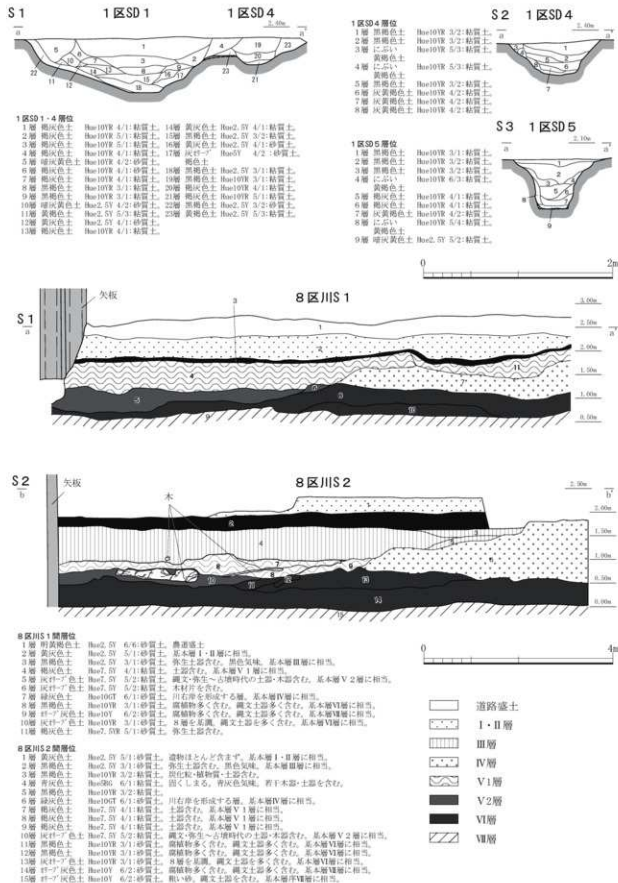
4) 方形周溝墓 (第29・31図)

1区SX1 (第29・31図) は、1区の中央部北寄りG8・G9、H8・H9・I9に位置し、1区SD4・3によって方形に区画された遺構である。1区SD4は、1区SD1によって切られており、北側の溝と西側の溝に分かれる。両溝の位置関係から鉤の手状にめぐる一連の遺構として扱った。1区SD4 (北側) の北東側は調査区外にのびており、調査区内で検出した長さは遺存値で約3.50m、上端幅は約0.95～1.25mをはかる。同SD4 (西側) は遺存値で長さ約6.80m、上端幅は約0.42～0.74mをはかる。いずれも、掘方の断面形は逆台形状をなす。1区SD4 (西側) の南東側には約1.54mの間隙を空けて、1区SD3を設けている。1区SD3の北東側は調査区外にのびており、調査区内で検出した長さは約7.10m、上端幅は約0.58～0.94mをはかる。平面形は直線状ではなく、南東側にわずかに膨らむ形状を呈する。掘方の横断形は逆台形状をなす。なお、調査区の北壁際では弥生土器が出土している。

1区SD3・同SD4によって区画された範囲内には、削平によって埋葬施設等の遺構は遺存していなかった。しかしながら、溝によって区画されていることから方形周溝墓と考えられる。北東側は調査区外に展開するが、1区SD3・同SD4で区画された規模は、検出された部分の北西から南東にかけて規模(南北長)は、溝の内側(内法)で約11.08m、溝を含めた外側(外法)で約13.44mをはかる。

5) 川 (第29・32・32図)

8区川 (第29・32・32図) は自然流路であり、南西から東へのび、E5・F5から南東に展開する。



第31圖 第IV区域 1区SD1・4・5 (縮尺1/40)、8区川1・S2 (縮尺1/80)



第32図 第IV区域 8区川内検出木道（縮尺1/100）

調査区内で検出した長さは約50.20m、幅は推定で最大約18.14m、深さは最大で約1.83mをはかる。底面は起伏に富み、標高約0.127～1.005mをはかる。大部分は標高約0.50～0.90mにおさまる。

6列には、川底を横断する形で広葉樹の巨木をはじめとする複数の樹幹材が検出された。最大の部材は遺存長約13.36m、根元の幅が約1.88mをはかる一木の樹幹材（胴部幅の最大値は推定約1.36m）である。検出状況から、巨木の樹幹材は渡河用の木道として設置されたものと推定される。また、この樹幹材の周辺にも複数の部材が散在しており、特に南西側には並行する形で別の部材が検出されている。川の堆積土層は、大きくⅠ～Ⅶ層に分けられ、縄文時代から古墳時代の遺物が出土した。特に、下位のⅥ・Ⅶ層からは縄文時代後期を中心とした縄文土器が多量に出土している。

なお、8区川の隣接箇所において、農業用排水路敷設に伴い工事立会を行っている（第1図立会⑤）。狭小な範囲ではあったが、工事立会箇所は土層の堆積状況から8区川の肩部にあたるものと推定され、工事施工範囲内の堆積土層中より、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の時期の土器がまともに出土している。

第4表 第IV区域遺構観察表

【土坑】

位置	標記	距離	時期	遺物	特徴
遺構	等尺図現	(m)	構造		
1区	第36区	長軸 幅 : 0.60m	—	—	—
		短軸 幅 : 0.42m			
第1	区域第15 (1)	深 度 : 0.20m	前期土坑	—	—
		形 状 : 不整形円形			
1区	第36区	長軸 幅 : 1.61m	—	—	—
		短軸 幅 : 1.32m			
G10・G11	第36区	深 度 : 0.34m	前期土坑	—	—
		形 状 : 不整形円形			
1区	第36区	長軸 幅 : 1.34m	—	—	—
		短軸 幅 : 1.22m			
第2	—	深 度 : 0.46m	前期土坑	—	—
		形 状 : 不整形円形			

【井戸】

位置	標記	距離	時期	遺物	特徴
遺構	等尺図現	(m)	構造		
1区	第36区	長軸 幅 : 2.20m	古代	—	—
		短軸 幅 : 1.70m			
第1	区域第15 (1)～(7)	深 度 : 0.56m	前期土坑	—	—
		深 度 : 0.56m			
		断面長軸 幅 : 1.97m			
		断面短軸 幅 : 1.71m			

【川溝】

【土坑群】

位置	標記	距離	時期	遺物	特徴
遺構	等尺図現	(m)	構造		
1区	第29-31区	上 幅 幅 : 1.27～1.04m	弥生時代	—	—
		深 度 : 0.29～0.71m			
第3	区域第16 (1)・(2)	下 幅 幅 : 0.31～0.93m	前期土坑	—	—
		深 度 : 0.49～0.65m			
1区	第29-31区	上 幅 幅 : 0.90～1.36m	弥生時代	—	—
		深 度 : 0.22～0.25m			
第9	—	上 幅 幅 : (0.14)	—	—	—
		深 度 : (0.34～1.03m)			
D3～F9	区域第17 (1)・(2)	上 幅 幅 : (0.34)	—	—	—
		深 度 : (1.12m)			
川	—	上 幅 幅 : (0.34)	—	—	—
		深 度 : (1.12m)			

【方形周溝】

位置	標記	距離	時期	遺物	特徴
遺構	等尺図現	(m)	構造		
1区	第26区	上 幅 幅 : 0.50～0.94m	弥生時代	—	—
		深 度 : 0.10～0.20m			
G8・H8	区域第16 (1)	下 幅 幅 : 0.17～0.49m	周溝	—	—
		深 度 : 0.10～0.25m			
1区	第29-31区	上 幅 幅 : 0.95～1.25m	弥生時代	—	—
		深 度 : 0.31～0.42m			
E9・F9	区域第16 (1)	下 幅 幅 : 0.17～0.42m	周溝	—	—
		深 度 : 0.17～0.42m			
1区	第29-31区	上 幅 幅 : 0.42～0.74m	弥生時代	—	—
		深 度 : 0.11～0.35m			
G9・H9 (西側)	(1)	下 幅 幅 : 0.17～0.46m	周溝	—	—
		深 度 : 0.17～0.46m			

位置	標記	規模	時期	遺物	特徴
遺構	写真位置	(m)	構造		
1区 G8・G9 H8・H9 I8・I9	第206	西 北 長 : 外径13.49m (北西→南東) 内径11.09m	奈良時代	—	1区の本館、1区SD1の北東側に位置する、1区SD3・SD4で区画された遺構である。遺構の中心の位置においてその地の遺構は掘り込まないもの、形状から、方形構造と推定される。北東半部は遺構区外にあるため、全体の形状は不明である。掘出した範囲内から推定すると、内径で一定の約1m、外径で約2mを以てするものと推定される。なお、1区SD4による住居跡の調査1区SD1によって知られているため形状は不明だが、高麗陶1区SD3・SD4が埋蔵せず撤去されている。なお、1区SD3・SD4は、1区SD1を構成する遺構である。
		東 西 長 : 外径12.2m以上 (北東→南西) 内径1.38m以上			
区1	区画第14 (1)	形 状 : 不整形方形	古墳以降		

註

- 遺構観察表を含め、本文で述べる遺構の規模・法量は、遺構検出面での計測値であり、現地で作成した図面および測量図から計測している。
- 平成22年(2010)8月および平成28年(2016)12月に、第1区域7区以西の事業予定地内(第1区遺構集中区B内)において試掘調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。
- 一定の規格性をもって、不整ながらも方形もしくは長方形に配置される柱穴列を掘立柱建物と認定した。現時点では掘立柱建物の上屋構造が明確ではないため、便宜上柱間数に係わず柱穴列で形成される平面形の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行とした。なお、建物を構成する柱穴は全てが直線的に配置されていないため、柱穴列の横断面は全ての柱穴の形状が把握できるように設定して実測・図化作業を行った。

建物の桁行長・梁行長は、建物の形状を矩形に復元したラインを基に測量図から計測したが、必ずしも柱穴の中心から計測したものではない。建物の桁行方位についてもこの建物復元ラインを基に座標北より計測した。また、調査区内において一部のみを検出した建物は、南北軸を桁行方向として扱い、方位を計測した。

検出した建物については並等の附属施設を含めた総面積から、便宜的に以下のように分類する。総面積が15㎡未満を小型、15㎡以上45㎡未満を中型、45㎡以上を大型とする。

なお、調査区全域で多数の柱穴を検出したが、現地調査段階では時間的制約のため全ての柱穴の配置状況を検証して建物の復元することが十分に行えなかった。このため、現地調査終了後に測量図から再度遺構の配置状況を検討した結果、新たに建物として復元したものもある。その他にも調査区内では建物の復元に至らなかった多数の柱穴を検出しており、建物の棟数はさらに多かったものと想定される。

以上の点を踏まえると、建物の復元については未だ検討の余地を残していると言わざるを得ないが、現時点での復元案として提示しておきたい。

- 井戸内部の構造物については、井戸が構築された時期および掘方の形状によって、構造が多岐にわたっている。本来ならば各井戸の構造や機能を踏まえて井戸内部の構造物呼び分けるべきだが、明確に機能差を識別できないことから、井戸内部の構造物については時期・構造を問わず、ここではすべて「井戸枠」と呼称することとする。
- 平成28年(2016)6月に第Ⅲ区域3区の南西側(F15に相当する箇所)において、県道の歩道拡幅工事に伴う工事立会を実施しており、掘立柱建物の一部と推定される柱穴列を検出している。これにより、第Ⅲ区域3区の居住域は、南側にさらに展開するものと考えられる。
- 平成29年(2017)1月に第Ⅲ区域2区の北側(L10・M10に相当する箇所)において、県道との交差点部における擁壁設置工事に伴う工事立会を実施しており、2区SD1につながる溝を検出している。この溝は、さらに北方へと展開する様相を示している。

第5表 掘立柱建物一覧表

区域	地区	遺構番号	平均長軸長 (単位：m)	平均短軸長 (単位：m)	総面積 (単位：㎡)
II	5区	SB 1	4.60	3.64	16.74
		SB 2	9.88	4.60	45.45
		SB 3	6.84	4.70	32.15
		SB 4	6.54	4.26	27.86
		SB 5	4.64	3.56	16.52
		SB 6	6.30	5.96	37.55
		SB 7	5.90	3.66	19.52
		SB 8	6.64	4.30	28.55
		SB 9	2.62以上	2.36以上	6.18以上
		SB10	3.48	2.48	8.63
III	6区	SB 1	10.56	4.62	48.79
		SB 1	4.75	3.72	17.67
III	2区	SB 2	2.52以上	1.89以上	4.76以上
		SB 1	4.11	1.28以上	5.26以上
	3区	SB 2	6.38	4.06	25.90
		SB 3	7.69	6.50	49.99
		SB 4	6.47	4.06	26.27
		SB 5	3.92以上		
		SB 6	3.12以上	3.09	9.64以上
		SB 7	2.38以上	4.64	11.04以上
		SB 8	9.30	2.57	23.90
		SB 9	4.88	3.06	14.93
		SB10 (北)	3.45	3.32	11.45
		SB10 (南)	3.72	3.32	12.35

平均長軸長・平均短軸長は、掘立柱建物を構成する各辺の柱穴列の長さの平均値である。庇等の附属施設を有する建物については、附属施設を含めた長軸長・短軸長から求めた。このため、長軸長＝桁行長、短軸長＝梁行長とはならない例も存在する。総面積も附属施設を含めた面積である。

第6表 掘立柱建物面積別分類表（太字は総柱建物）

総面積	第II区域	第III区域	棟数
5㎡以上10㎡未満	5区SB10		1
10㎡以上15㎡未満		3区SB 9 3区SB10 (北) 3区SB10 (南)	3
15㎡以上20㎡未満	5区SB 1 5区SB 5 5区SB 7	2区SB 1	4
20㎡以上25㎡未満		3区SB 8	1
25㎡以上30㎡未満	5区SB 4 5区SB 8	3区SB 2 3区SB 4	4
30㎡以上35㎡未満	5区SB 3		1
35㎡以上40㎡未満	5区SB 6		1
40㎡以上45㎡未満			0
45㎡以上50㎡未満	5区SB 2 6区SB 1	3区SB 3	3
不明	5区SB 9	2区SB 2 3区SB 6 3区SB 1 3区SB 5 3区SB 7	6

第4章 まとめ

第1節 遺跡について

今回の調査区では、全体に削平を受けていたものの、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を多く検出した。以下に、検出された各時代の遺構について簡単にまとめた。

縄文時代の人為的な遺構は検出されなかったが、縄文時代にまで遡る川跡を第IV区域8区にて検出している。この川跡は、当遺跡の東方を北流する片川の分流であった可能性もあり得る。

弥生時代から古墳時代に属する遺構は僅少で、主要なものとして土坑・井戸および溝等がある。特に、第IV区域1区SX1は溝によって方形に区画された遺構であり、弥生時代の方形周溝墓と推定される。さらに、第IV区域1区から第III区域2区にかけて展開する溝1区SD1・2区SD1は、南北方向に展開する長大な溝であることから集落域を画するための区画溝と考えられる。

古代から中世に至ると桁行方向を南北に揃えた掘立柱建物が、空閑地を設けて多数構築されている。第II区域5区で10棟、第II区域6区で1棟、第III区域2区で2棟、第III区域3区で10棟（建替を別にすれば11棟）、全調査区で計23棟、建替も別棟とすれば総計で24棟の掘立柱建物を検出している。平面形が方形を呈する柱穴を有する建物が多く、5区SB1のような総柱建物も存在する。建物の時期については明確にとらえられず、中世にまで降る可能性がある建物が存在するもの、多くの建物は柱穴や周辺の遺構から出土した遺物から、8世紀後半代から9世紀前半代に属すると推定される。

その他、中世の主要な遺構として井戸を多数検出している。出土遺物から、井戸の多くは概ね13世紀後半代から14世紀前半代に位置付けられよう。

波寄三宅田遺跡の今回の調査区は、九頭竜川下流域左岸に展開する水田地帯に位置する。第2章でも述べたように、遺跡の南側の丘陵部には数多くの古墳群が築造されていることから、早い時期から要衝の地として拓かれた地域であったと推定される。また、遺跡名となっている「三宅田」は「屯倉（ミヤケ）」に通じ、それに関連するように当遺跡の西方には東大寺領高串荘の比定地となっている。加えて、遺跡の西側には九頭竜川が北流しており、河川を介した交通や物流も発達していたものと考えられる。以上の点から、検出された古代の建物群は、一般的な農村集落とは考え難く、荘園の管理・運営等、ひいては物資の流通や交通の管理を目的に公的機関によって整備された建物群であると考えられる。

第2節 掘立柱建物について

今回の調査区で検出された掘立柱建物は、建替のものを別棟として数えると24棟にのぼる。建物の多くは、多少の差異はあるものの建物の桁行方向（長軸方向）をほぼ南北方向に揃えている。

座標北を基準にして建物の桁行方向の方位についてみれば、波寄三宅田遺跡第II区域のII A群では、 $10\sim 20^\circ$ 前後西偏するものが5棟（5区SB2～4・8・9）と、 75° 前後東偏する建物が2棟（5区SB1・10）に分かれる。おおよそ、前者と後者が直交するように設けられていると言える。第II区域II B群では、 $10\sim 20^\circ$ 前後西偏する建物が3棟（5区SB5・6、6区SB1）と、約 70° 東偏する建物が1棟（5区SB7）に分かれる。II B群においてもII A群と同じく直交する形で両者が設けられている。ただし、前章でも述べたように、5区SB6と5区SB7は一続きの建物である可能性もある。その場合、II B群では桁行方向はすべての建物がほぼ揃うことになる。

第Ⅲ地域では、ⅢA群では1°西偏する建物が1棟（2区SB1）、10～20°西偏する建物が7棟（2区SB2、3区SB1～5・8）、70°前後西偏する建物が3棟（3区SB9・SB10）に分かれる。ⅢB群では、5°西偏する建物2棟（3区SB6・7）からなる。

前述のように、建物の桁行方向を南北方向に意識して揃えて設けていることから一定の規制の中で計画的に配置された建物群と考えられる。そのような中において、桁行方向が南北方向から大きく逸脱する建物（第Ⅲ区域3区SB9・10）は、規制が及ばなくなった段階の建物と考えられ、後出の可能性がある。ただし、あくまで推定であり、出土遺物も含めて再度検証する必要がある。

次に、中世に属する可能性がある3区SB8～10を除いた各建物の総面積（附属施設を含む）を概観すると、建替も別棟として数えるならば、5㎡以上15㎡未満の小型の建物が1棟、15㎡以上45㎡未満の中型の建物が10棟、45㎡以上50㎡未満の大型の建物が3棟、規模不明の建物が6棟となる。総面積のわかる建物14棟うち中型の建物が全体の約71%を占め、さらに中型の建物について15㎡以上30㎡未満を中型Ⅰ、30㎡以上45㎡未満を中型Ⅱとして細別すると、前者が全体の約57%、後者が全体の約14%を占める。古代の掘立柱建物を10棟以上検出した他の遺跡について概観すると⁽¹⁾、おおよそ以下の傾向がみられる。総面積がわかる掘立柱建物のうち、①中型の建物が全体の約50%を占め、細別では中型Ⅰが約30～40%、中型Ⅱが10～20%を占める遺跡（永平寺町吉野塚遺跡、福井市菅谷島帽子遺跡、勝山市志田神田遺跡）、②中型の建物が全体の約60～70%を占め、細別では中型Ⅰが30～50%、中型Ⅱが20～30%を占める遺跡（坂井市兼兼・坪江遺跡、福井市今市岩畑遺跡、大野市太田・小矢戸遺跡）、③中型の建物が70%以上を占め、細別では中型Ⅰが約40～45%、中型Ⅱが約35%を占める遺跡（大野市横枕遺跡、越前市高森遺跡）におおよそ分けられる。小型の建物については、①から③にかけてその構成比率が減少し、逆に中型Ⅱや大型の建物が増加する傾向が見られ、③では総面積が90㎡を超える大型の建物が存在する。構成比率からは、①から③にかけて中型建物も含めて、建物の総面積が大型化する様相が見て取れる。波寄三宅田遺跡の様相は、その構成比率から②の様相に近いと言えよう。ただし、建物の総面積における構成比率の差異は、調査範囲の制約、および遺跡の存続期間の影響によるものとも考えられる。しかしながら、建物の規模の差異は、機能や運用上の差異を現わしており、ひいては各遺跡の政治的あるいは経済的な機能上の違いを示すものと考えられ、その差異が構成比率にも反映されている可能性はあながち否定できないだろう。なお、今回はその差異の要因や背景までを導くことまではできなかったが、歴史的・地理的な環境も踏まえて、引き続き検討すべき課題と言えよう。

註

1 各遺跡の掘立柱建物の総面積は、報告書の本文中に記された数値および観察表記載の面積を引用しているが、一部については報告書に掲載された実測図から改めて面積を求めた例もある。なお、各遺跡の掘立柱建物の内訳・棟数は以下の通りである。

坂井市兼兼・坪江遺跡	小型：2棟、中型Ⅰ：5棟、中型Ⅱ：5棟、大型：3棟	（計15棟）
永平寺町吉野塚遺跡	小型：7棟、中型Ⅰ：6棟、中型Ⅱ：3棟、大型：1棟	（計17棟）
福井市菅谷島帽子遺跡	小型：4棟、中型Ⅰ：5棟、中型Ⅱ：3棟、大型：3棟	（計15棟）
福井市今市岩畑遺跡	小型：4棟、中型Ⅰ：13棟、中型Ⅱ：6棟、大型：4棟	（計27棟）
勝山市志田神田遺跡	小型：5棟、中型Ⅰ：5棟、中型Ⅱ：1棟、大型：1棟	（計12棟）
大野市太田・小矢戸遺跡	小型：8棟、中型Ⅰ：24棟、中型Ⅱ：9棟、大型：4棟	（計45棟）
大野市横枕遺跡	小型：7棟、中型Ⅰ：18棟、中型Ⅱ：15棟、大型：4棟	（計44棟）
越前市高森遺跡	小型：2棟、中型Ⅰ：16棟、中型Ⅱ：12棟、大型：5棟	（計35棟）

第2章

- 青木豊昭 1979 「三里浜周辺地域の遺跡について」『重要遺跡緊急確認調査報告(II)』福井県埋蔵文化財調査報告第3集
福井県教育委員会
- 青木豊昭 1986 「波寄遺跡」『福井県史』資料編13考古 福井県
- 岩田武志 1990 「水切古墳群」『福井市史』資料編1考古 福井市
- 大川 進 2002 「浄土寺古墳群」『第17回 福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 木下哲夫・工藤俊樹 1982 「福井市深坂町小縄遺跡試掘調査略報」『古代』第73号 早稲田大学考古学研究室
- 柳部正典・川越光洋編 2001 『法土寺遺跡Ⅰ』福井県埋蔵文化財調査報告第49集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 坂 靖志編 1993 『剣大谷1号墳発掘調査報告書』福井市教育委員会
- 下中国彦編 1981 『福井県の地名』日本歴史地名体系第18巻 平凡社
- 鈴木篤英 2008 『漆谷遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第31集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 竹内理三編 1989 『角川地名大辞典』18福井県 角川書店
- 月輪 泰・柳部正典編 2003 『法土寺遺跡Ⅱ』福井県埋蔵文化財調査報告第63集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中森敏晴編 2016 『小尉遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第130集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 沼 弘・白崎 卓・渡辺貴美 1990 「葛藤谷遺跡群」『福井市史』資料編1考古 福井市
- 沼 弘・白崎 卓・渡辺貴美 1990 「三宅古墳群」『福井市史』資料編1考古 福井市
- 藤原武二 1990 「佐野館跡」『福井市史』資料編1考古 福井市
- 藤原武二 1990 「黒丸城(館)跡」『福井市史』資料編1考古 福井市
- 山本博文 2004 「フォーラム一地形図に現れる福井の地域環境 7: 福井平野の形成と地域区分一地形図と空中写真から見た福井平野一」『福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 日本海地域の自然と環境』第11号 福井大学地域環境研究教育センター
- 南 洋一郎 1986 「浜島遺跡」『福井県史』資料編13考古 福井県

第3章

- 秋田裕毅(大橋信弥編) 2010 『江戸』ものと人間の文化史150 財団法人法制大学出版局

第4章

- 青木隆住編 2014 『吉野堀遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第147集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 赤澤徳明編 2008 『今市岩加遺跡(本文編)』福井県埋蔵文化財調査報告第34集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 鈴木篤英 2009 『菅谷舟帽子遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第104集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 鈴木篤英 2014 『横枕遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第148集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 田中勝之編 2015 『太田・小矢戸遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第155集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中川佳三編 2006 『兼兼・坪江遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第88集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 西野吉幸 1987 『新町遺跡 第1次発掘調査概要報告書』武生市埋蔵文化財調査報告Ⅳ 福井県武生市教育委員会
- 山口 充編 1978 『高森遺跡発掘調査概報Ⅰ』武生市埋蔵文化財調査報告Ⅰ 福井県武生市教育委員会

写 真 图 版

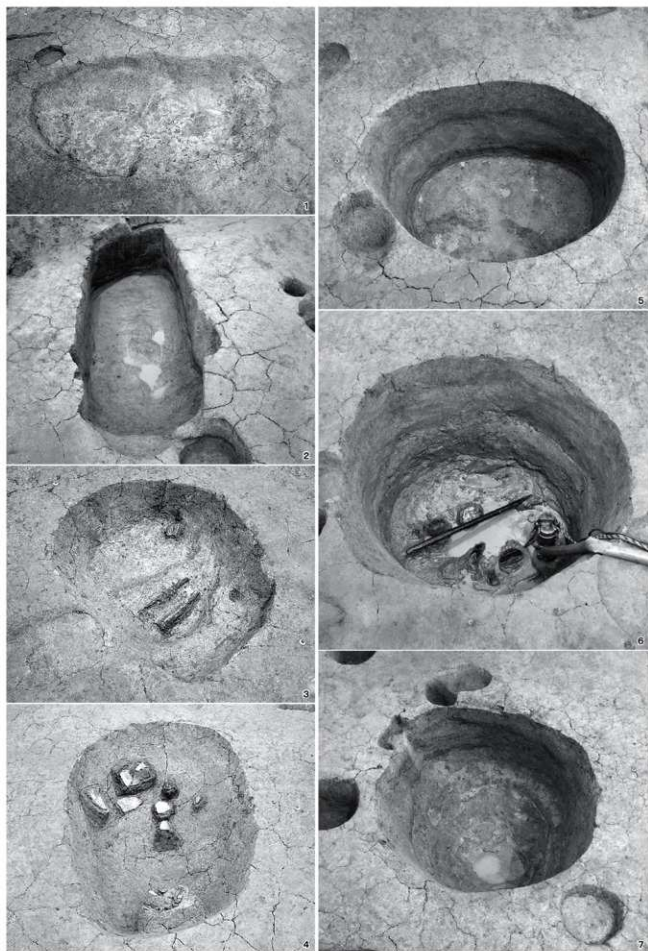


(1) 第1区域7区 (南から)



(2) 第1区域7区 (西から)

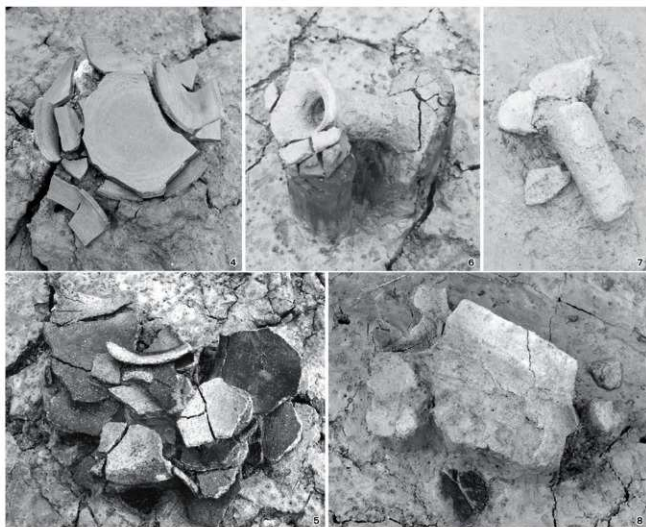
図版第二 遺構
第1区域七区



(1) 7区SK1 (南東から) (2) 7区SK2 (東から) (3) 7区SK3 (南から) (4) 7区SK4 (南から)
 (5) 7区SE1 (南から) (6) 7区SE2 (南から) (7) 7区SE3 (南から)



(1) 7区川、SD15・16 (南東から) (2) 7区川X003出土土器 (南から) (3) 7区川X004出土土器 (東から)



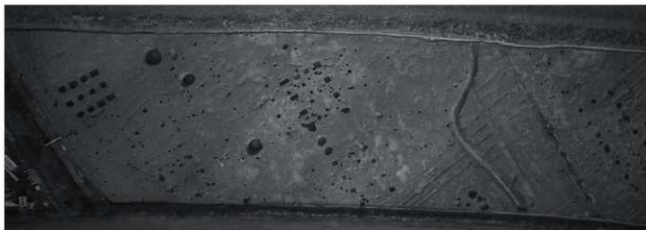
(4) 7区川X001出土土器 (南から) (5) 7区川X002出土土器 (南から) (6) 7区川X005出土土器 (南から)
 (7) 7区川X006出土土器 (南から) (8) 7区川X007出土土器 (北から)



(1) 第Ⅱ区域六区（北西から）



(2) 第Ⅱ区域六区（南西から）



(1) 第Ⅱ区域五区(南西から)



(2) 第Ⅱ区域五区(北西から)



(1) 第Ⅱ区域五区 (北西から)



2



3

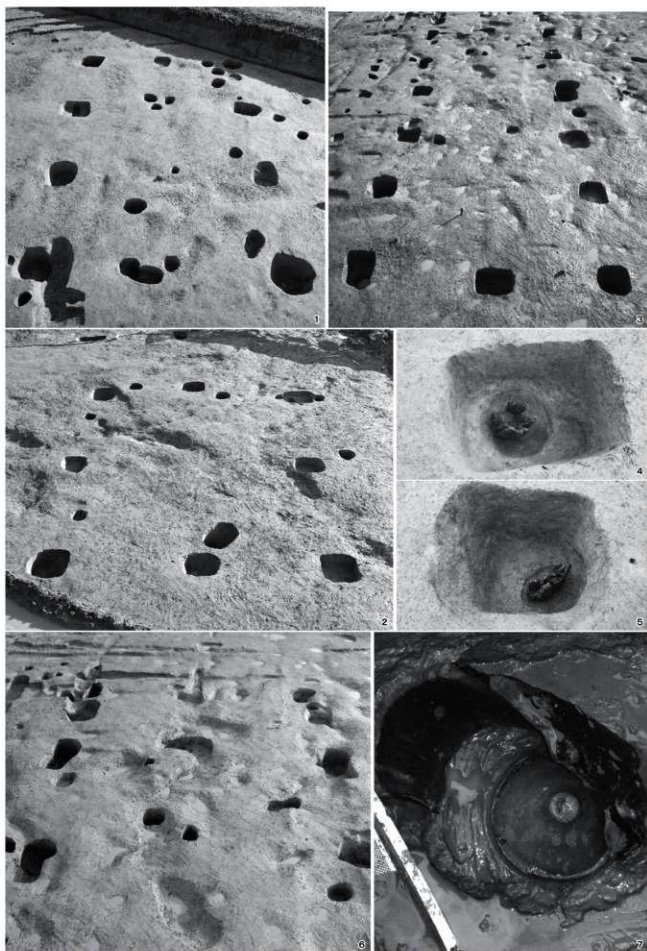


4



5

(2) 5区SB1 (北西から) (3) 5区SB1柱穴5 (北から) (4) 5区SB2 (北西から) (5) 5区SB3 (北西から)



(1) 5区SB4 (北西から) (2) 5区SB5 (北西から) (3) 5区SB6 (北西から) (4) 5区SB6柱穴9 (南東から)
 (5) 5区SB6柱穴7 (北東から) (6) 5区SB7 (北西から) (7) 5区SE1 (南から)



(1) 5区SE2 (北西から)



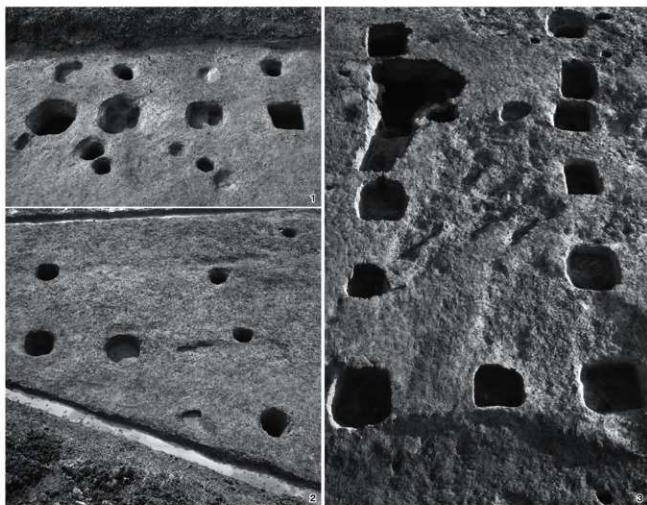
(2) 第III区域2・3区 (北西から)



(1) 第Ⅲ区域二・三区 (南西から)



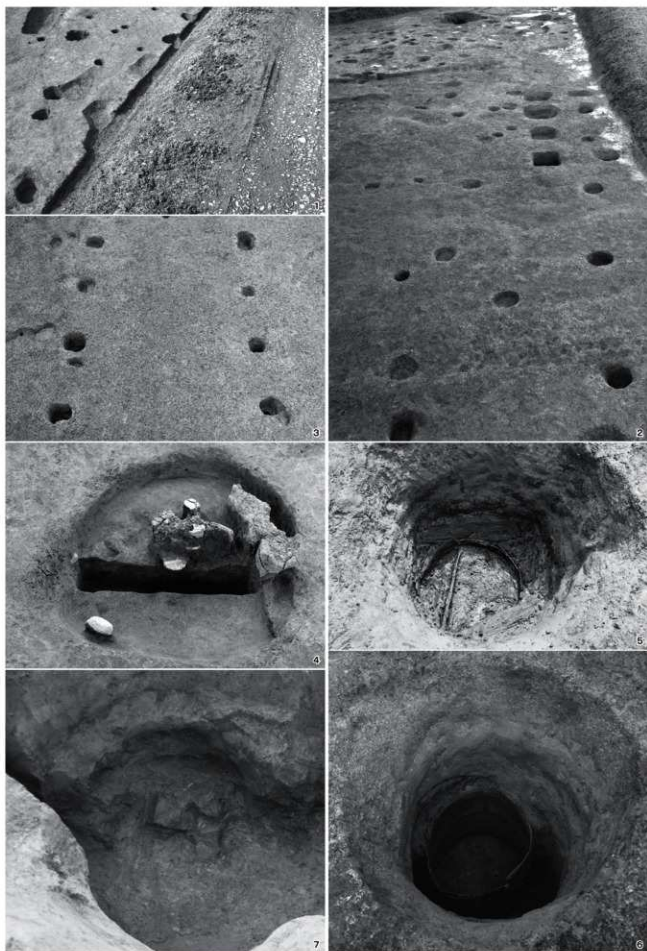
(2) 第Ⅲ区域二・三区 (北西から)



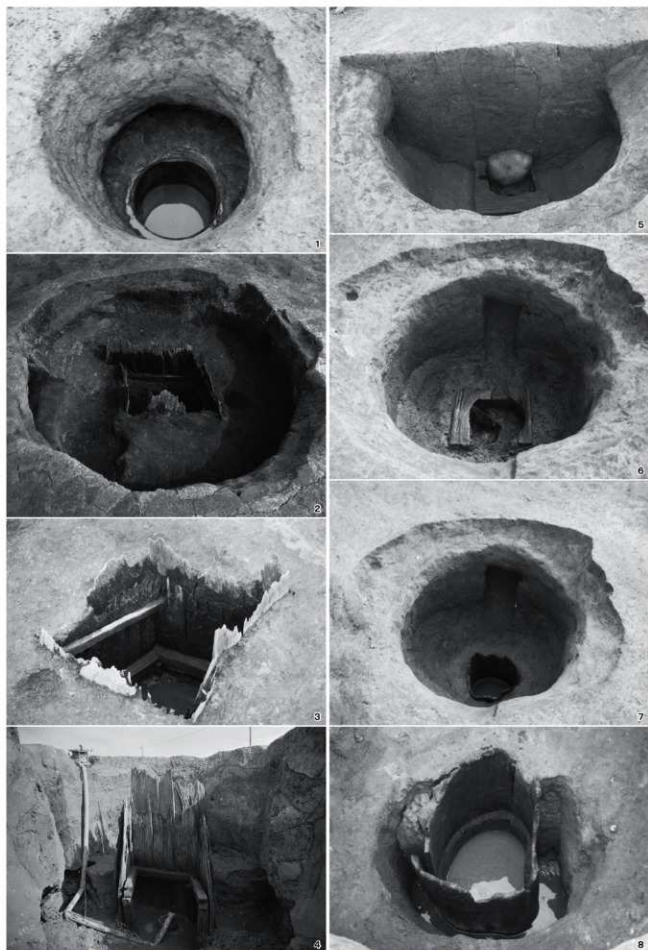
(1) 3区SB1 (東から) (2) 3区SB6 (北西から) (3) 3区SB4 (北西から)



(4) 3区SB3 (南東から)



(1) 3区SB7 (東から) (2) 3区SB8 (北から) (3) 2区SB1 (北から) (4) 3区SK9 (南から)
(5) 3区SE1 井戸棒上面 (北から) (6) 3区SE1 (北から) (7) 3区SE2 (南西から)



(1) 3区SE3 (北から) (2) 3区SE5 (西から) (3) 3区SE5 井戸枠 (南東から) (4) 3区SE5 井戸枠 (西から)
 (5) 3区SE6 (北東から) (6) 3区SE6 井戸枠上面 (北西から) (7) 3区SE6 (北西から) (8) 3区SE6 井戸枠 (北東から)



(1) 第IV区域1区(南から)



(2) 第IV区域1区(西から)



(1) 第IV区域1区 (南東から)



(2) 第IV区域1区 (南から)



(1) 1区SK1 (北西から) (2) 1区SK2 (北から) (3) 1区SE1 (北から) (4) 1区SE1底部 (東から)
 (5) 1区SE1井戸枠 (東から) (6) 1区SE1井戸枠底部 (北東から) (7) 1区SE1井戸枠北西隅 (北西から)



(1) 1区SX1 (南西から)



(2) 1区SD1 (北から)



(3) 1区SD1 (南から)



(4) 1区SD3 (南西から)



(1) 第Ⅳ区域8区(北西から)



(2) 第8区川床木道(南西から)



(1) 8区川Ⅵ層除去後（北西から）



(2) 8区川断面S1（北東から）

報告書抄録

ふりがな	なみよせみやけだいせき							
書名	波寄三宅田遺跡							
副書名	一般国道416号道路改良工事に伴う調査							
巻次	第1分冊遺構編・第2分冊遺物編Ⅰ・第3分冊遺物編Ⅱ							
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第172集							
編著者名	清水孝之(編) 工藤俊樹(編) 山本孝一(編) 鈴木篤英 赤澤徳明 富山正明 中原義史							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644 E-mail: maibun-c@pref.fukui.lg.jp							
発行年月日	2021年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なみよせみやけだ 波寄三宅田 いせき 遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 なみよせみやけ 波寄町	18201	01044	36° 9' 28"	136° 8' 56"	20100701～ 20101228 20110401～ 20110831	10,670	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
波寄三宅田 遺跡	集落	縄文時代 早期～晩期	川	縄文土器・石器・ 石製品・土製品		8区川から遺物が多量 に出土し、大珠・石棒・ 土偶も出土した。		
		弥生時代後期～古墳時 代前期	方形周溝墓・ 溝・土塚・ 井戸・川	土器・玉作り関連 遺物・玉類・木器・ 木製品		主に第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区域 に展開する。		
		古代	掘立柱建物・ 井戸	須恵器・土師器・ 墨書土器・瓦		主に第Ⅱ・Ⅲ区域に展 開する。		
		中世	掘立柱建物・ 井戸	陶磁器・土師器・ 土製品・木製品		主に第Ⅲ区域に展開す る。		
要約	<p>波寄三宅田遺跡は、福井市波寄町集落の北東側に位置し、九頭竜川左岸の氾濫原に広域に展開する。現状は標高3mを測る水田地帯であるが、古代まで遺跡の北西側には三里浜の砂丘を境に潟湖が存在していたと考えられ、潟湖を利用して集落が営まれたと考える。</p> <p>遺構の主な時期は、弥生時代後期～古墳時代前期および奈良・平安時代の古代に大別でき、前者については第Ⅳ区域1区SD1と第Ⅳ区域8区川において大量の土器を検出した。後者については第Ⅱ・Ⅲ区域においては整然と配置された建物群を検出し、遺跡の中心部を捉えることができた。建物群は、重複して構築した形跡がなく、共存する遺物も少量の供膳具を主体としていることから、居住集落ではなく荘園を管理するような公的施設であった可能性が高い。</p> <p>遺物は、第Ⅳ区域8区川から出土したものが大半を占め、川の上層で弥生時代後期～古墳時代前期の土器、玉作り関連遺物、木器が出土し、川が形成される以前の最下層から膨大な量の縄文時代の土器、石器を検出した。縄文土器の時期は早期～晩期におよぶが、後期初頭から前葉が量の主体をなす。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

波寄三宅田遺跡

— 一般国道416号道路改良工事に伴う調査 —

第1分冊 遺構編

令和3年3月5日 印刷

令和3年3月15日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10
印刷 白崎印刷株式会社
〒910-0843 福井県福井市西開発3-715
